ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 37 号

篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について……伊野　近富…… 1

伽倻前史を彩る文化遺産(2)……李　榮　勲(訳 松井忠春)……13

—韓国義昌・茶戸里遺跡第3・4次発掘調査略報—

—平成2年度発掘調査略報—……19

1. 山形古墓群第2次　3. 里　遺　跡

2. 杉　末　遺　跡　4. 京大北部構内遺跡

資料紹介　丹波町蒲生窯跡の須恵器……森　正・松室　孝樹……23

資料紹介　綾部市馬場池東方遺跡出土遺物について……田代　弘……28

府下遺跡紹介　48. 小野毛人墓……32

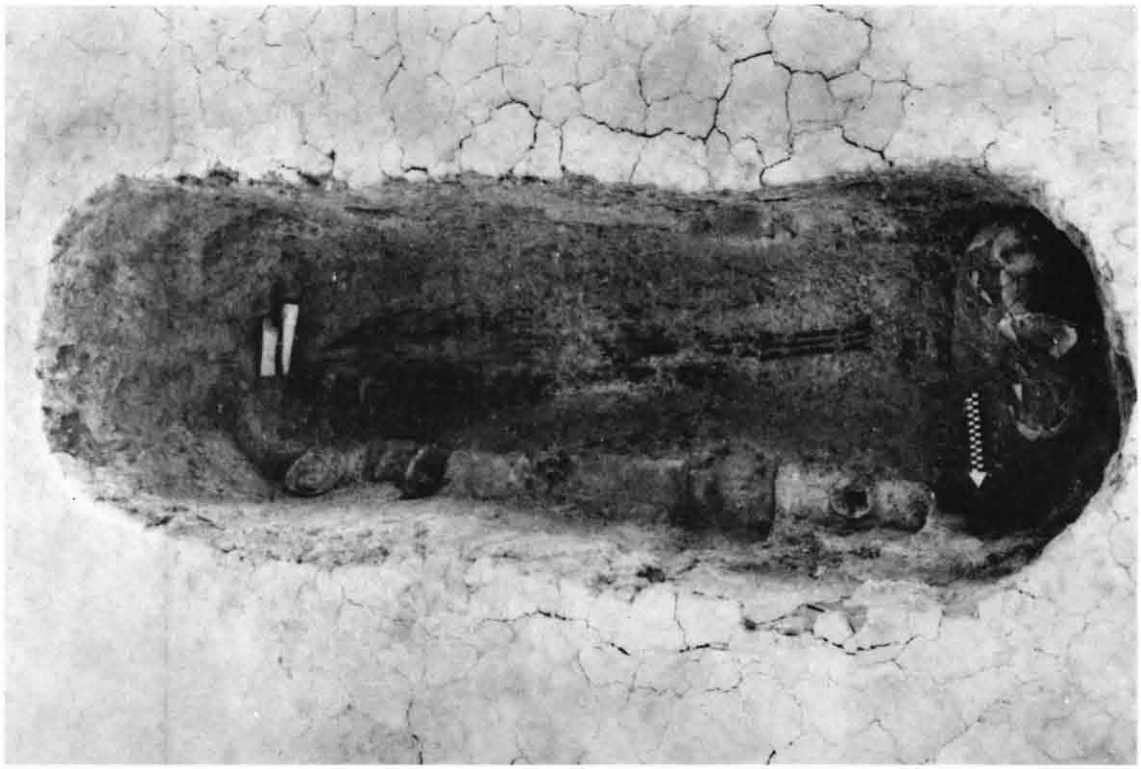
長岡京跡調査だより……35

センターの動向……39

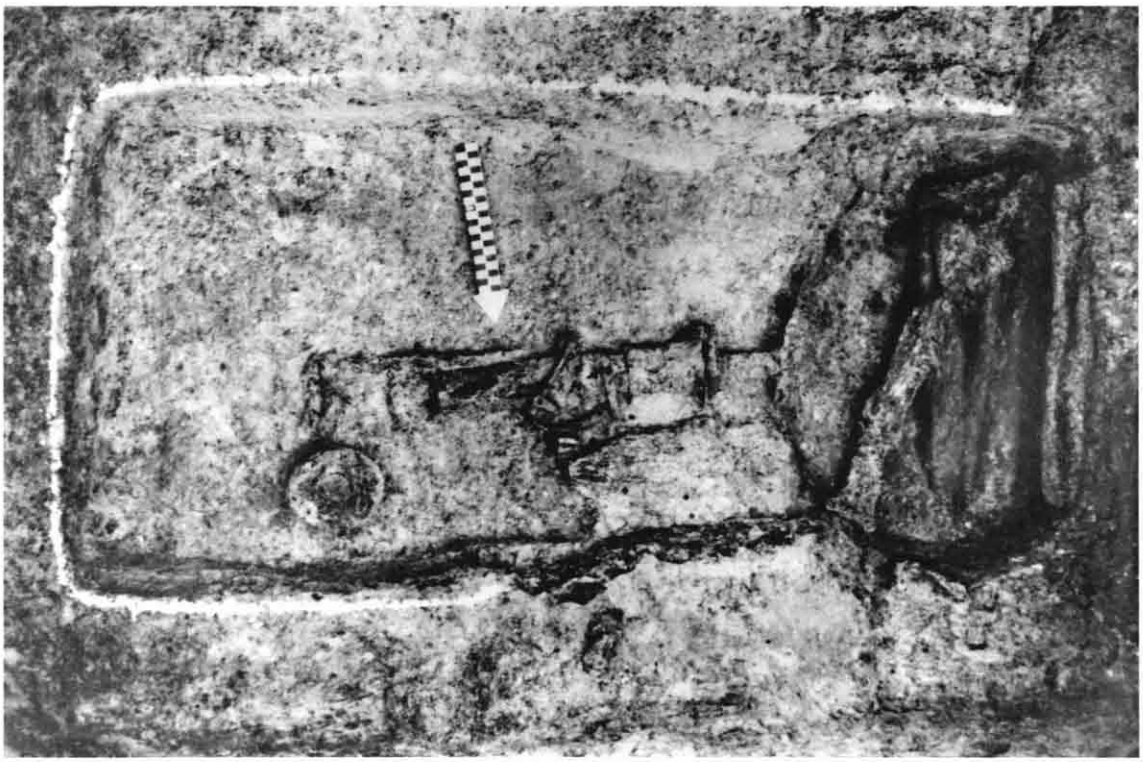
受贈図書一覧……41

1990年9月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター



(2)　第24号墳主体部全景



(1)　第19号墳主体部全景

篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について

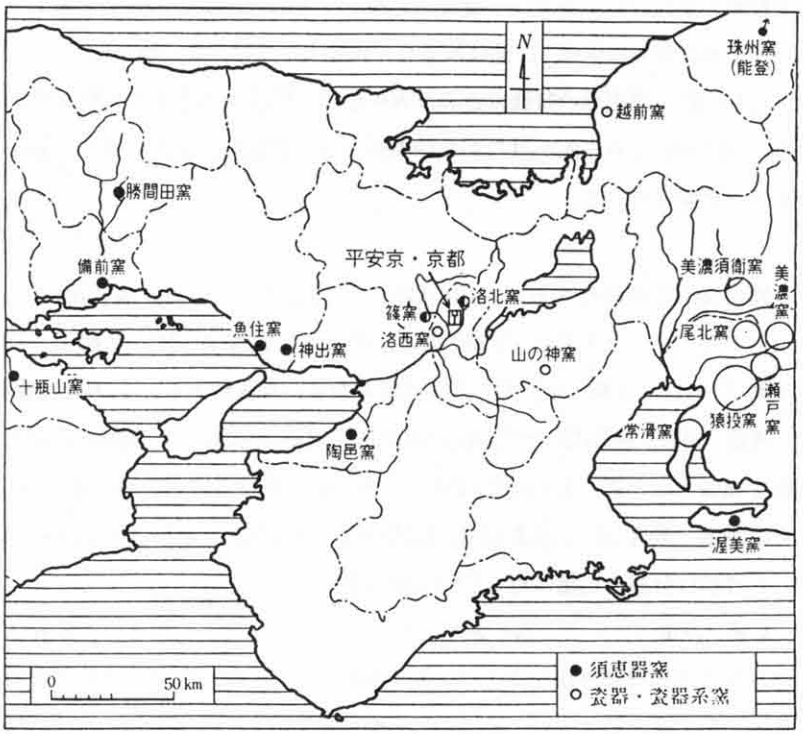
伊野近富

1. はじめに

京都市の西方にある亀岡市は，大堰川が貫流した盆地を擁している。その篠町にある須恵器窯(一部緑釉陶器も焼成)が，平安時代前半の畿内で重要な役割を果たしたことは，先学の述べるところである。(注1) それは，古墳時代から奈良時代にかけて畿内，更には全国的にも主導的な役割を果たした，大阪府陶邑古窯跡群に匹敵するものであるが，さて，陶邑から篠への交替が長岡京からなのか，平安京からなのか，またそれが急激なのかどうかについては現在のところ，説得的な見解はない。

そこで，本稿では器形の一部分に注目すれば，陶邑と篠の製品が峻別できることを指摘し，窯業地の交替の状況を具体的に把握できることを呈示したい。そして，この微視的な作業によって，2窯の特質の差，つまり，古墳時代以来の伝統窯である陶邑の特質と，奈良時代中期からの新興窯である篠の特質を指摘したい。

具体的な作業としては，まず，篠における編年図を呈示し，これによって陶邑



第1図　平安京・京都と主要窯跡の位置(注2)(文献1)

との違いを明確にしたい。

そして，器形の分析を通して都市への供給窯の変遷について明確にしたい。では，編年から始める。

2.　篠窯出土須恵器の編年

篠の編年については，石井清司氏の労作(注3)がある。これは，25年単位で設定したものだが，私は100年を3分割したものを作成した。理由は，鉢と壺に注目したためで，杯や皿に比べて変化のスピードが遅いことによる。また，生産地(窯)においても2型式程度がしばしば共存し，かつ，消費地においても複数の型式が伴出する状況では，私達が把握した型式が時間的な差なのか，工人差であるのか明確にし難いので，やや長く時間幅を設定することにした。

第2・3図がその編年図(注4)である。篠で出土したすべての器種を載せたわけではないが，おおかたの様相は知ることができよう。ここでは，なるべく単純な組成の窯出土資料と，須恵器製作の作業場の土坑出土資料の中で，一括性の高いものを基礎とした。そして，どうしても不足したか所の場合，表採資料も若干使用した。年代観については後述するが，消費地で年代のわかっている資料と対比して決めた。また，型式分類については9世紀までは平城宮分類(注5)に依拠し，他は篠独自で決めた。では，古い順からポイントを列挙したい。

なお，篠の須恵器の特徴は色調が青灰色で，胎土中にあまり砂粒を含まず，他の窯の資料(京都府内)より表面が滑らかな印象がある。消費地にもたらされた製品は，あまり歪みをもたず整っている。

篠の製品を序列化すると，10小期に分けることができる。仮にA～Jとし，これをいくつかグルーピングすると，5期となる。すなわち1期(A～B)，2期(C～D)，3期(E～F)，4期(G～H)，5期(I～J)である。ではおおまかな説明をしたい(B期は資料なし)。

A期　杯A，杯B(貼りつけ高台)がある。規格は杯Aが2，杯Bが4以上ある。金属製の椀を模倣したと思うもの(27・28)と，その蓋と思うもの(26)がある。他に皿A・皿B，高杯，平瓶，壺A(31)と同蓋(30)，鉢E(32)，鉢A(33)などがある。なお，これらの指標とした資料は付表1に掲げた(以下の項も同様)。

C期　器種については図の通りであるので，ここでは注目すべき製品のみ行う。壺E(57)は平城宮出土例より頸部直下の屈曲が緩やかである。壺L(54・55)は大型も小型も，口縁端部に粘土紐を貼りつけ，断面が三角形を呈するが，平城宮のそれは，特に小型のものは口縁部を肥厚せず，端部を丸くおさめるもので，差異がある。鉢Dは長岡京でよく見るタ

イプである。高台をつけ，口縁端部はほぼ水平であることを特徴とする。

D期　B期と時間幅がほとんどないものを多く入れてあり，差異が明瞭ではない。傾向としては，盤B(89)や鉢D(95)のように，口縁端部は水平でなくなり，やや外側に傾斜(口縁内側が高く，外側が低い)する。壺M(84)は前代と同様に，断面が三角形を呈するもので，貼りつけ高台がつく。

E期　これまでは，平城宮分類でほとんど足りたが，この時期から篠独特の器形が増える。杯Aは前代まで2～4規格あったようだが，ここでは2分するようなまとまりはなくなる。杯Bの高台は退化し，シャープさを失っている。また，底部と体部の境に接合している。蓋はつまみをつけなくなる。壺M(121・122)は，口縁部を斜め上にひねり出したような形をしており，高台は糸切りのままである。壺(117)は筆者が別稿で推定した長沙銅官窯模倣のもので，仮称として篠壺Ⅰ(SiⅠ)とした。壺(119)は船どっくりのような形をしているが，これも仮称として篠壺Ⅱ(SiⅡ)とした。皿には施釉陶器の形をしたもの(114)もある。鉢Dの底部は糸切りのままで，体部はスリムとなる。

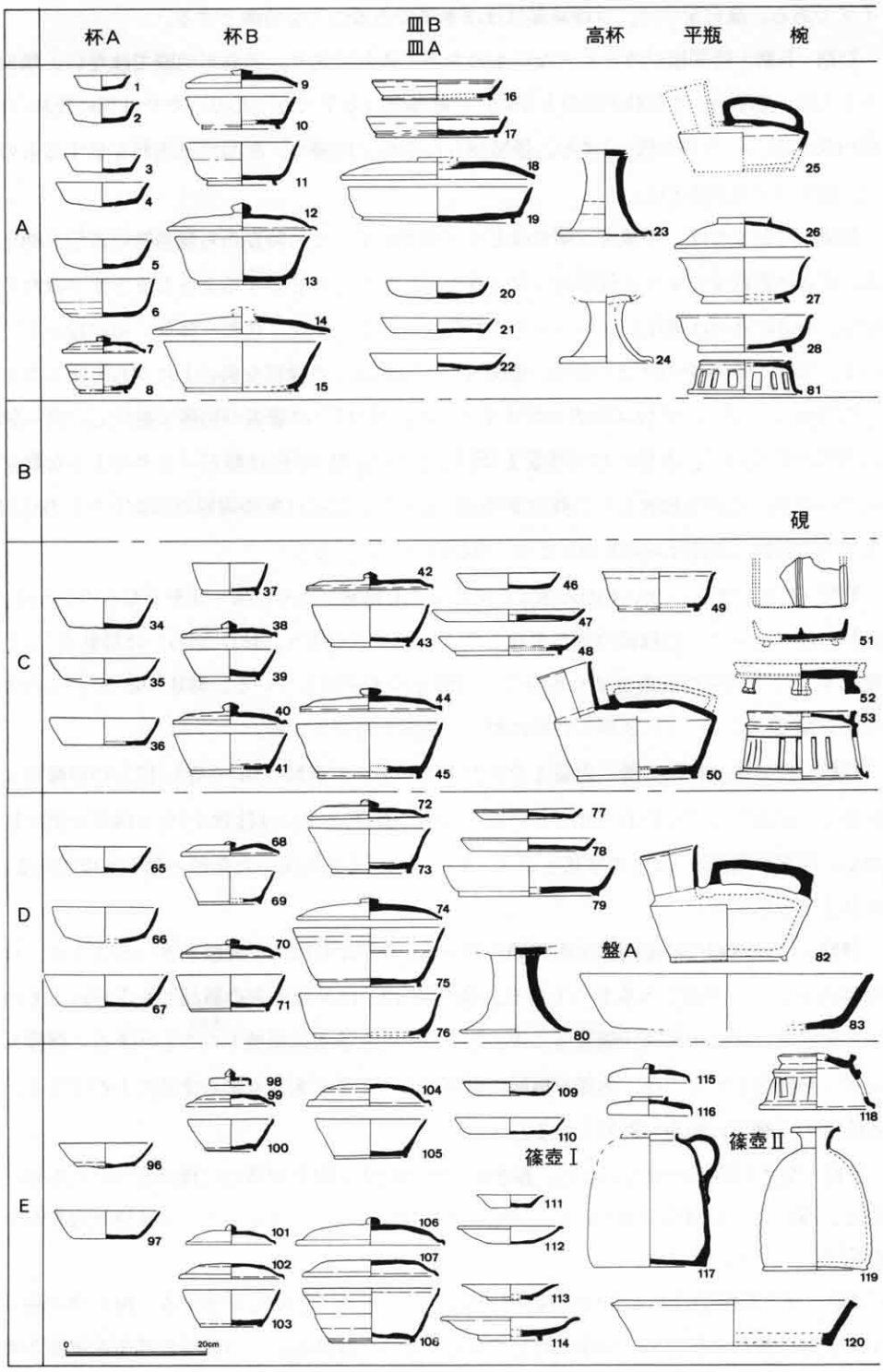
F期　蓋はつまみのないものが多く，あるものも横幅がなく，高く変形したものとなる。壺M(156・158)は，口縁部の形が退化してシャープさを失う。鉢D(あるいは篠鉢Ⅰ)は口縁部を「く」の字に屈曲させたもので，内側をつまみ出している。盤B(163)は，前代までの口縁部がシャープに成形したのに対し，丸味を帯びている。

G期　椀や皿は施釉陶器の影響を受けたものが多い。壺M(176)や壺L(177)の口縁部は外反し，端部を上下にひねり出している。前代の鉢D(あるいは篠鉢Ⅰ)の口縁部が更に屈曲し，端部の断面は「T」の字状となり，その下は低く外に開いた体部となるものである。篠鉢Ⅱと仮称する。

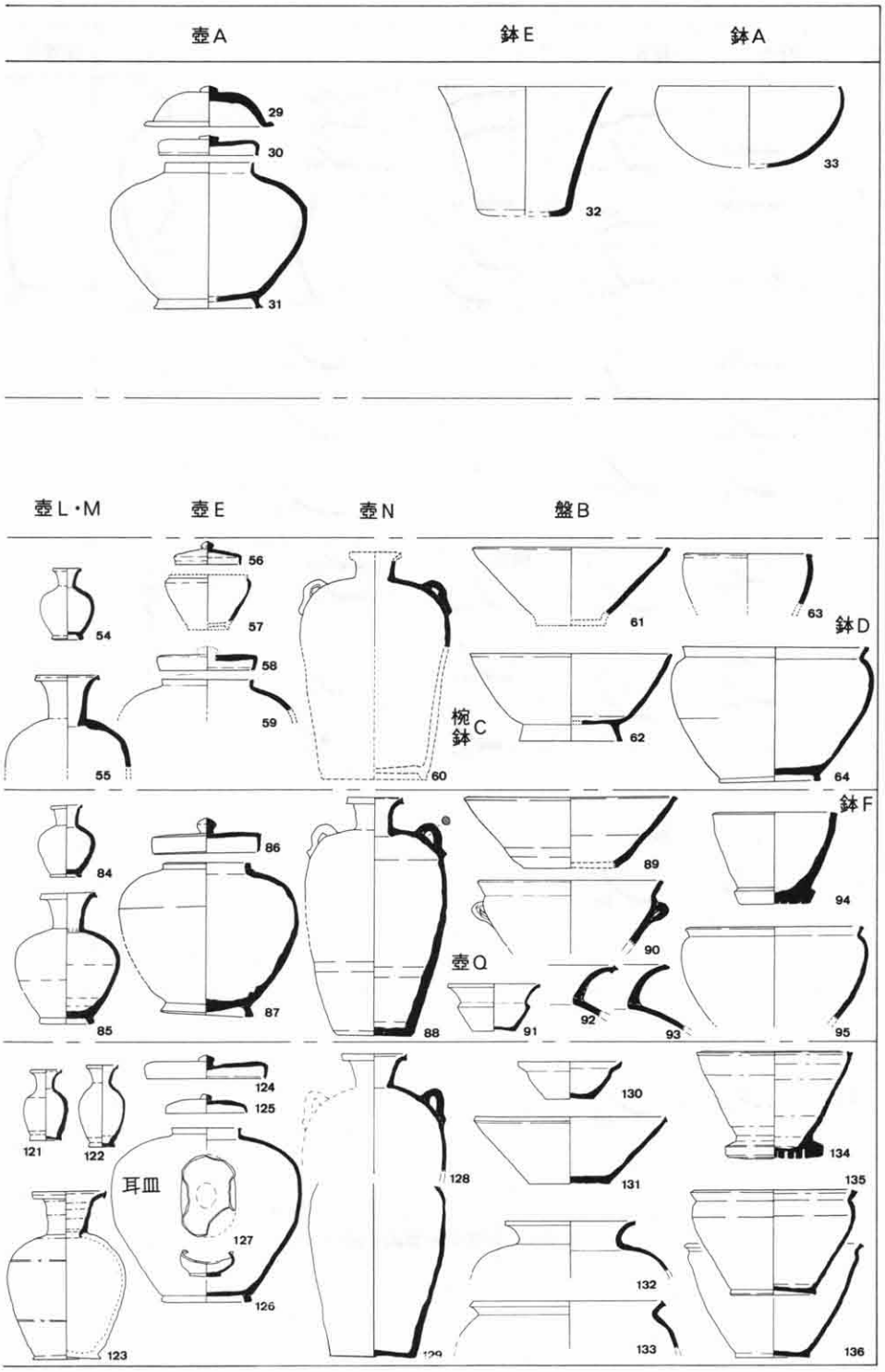
H期　この時期は緑釉陶器生産時期に当たる。杯Bは前代から兆候があったように，口縁端部がもっと内側に入るものである。篠壺Ⅲ(193)は東海地方の製品にもみられるもので，元をただせば中国長沙銅官窯に求められることを筆者は指摘した(注6)ことがある。篠壺Ⅳ(197・198)としたものは，体部を極端に扁平にして下半を大きく膨らませたものである。篠鉢Ⅱの口縁部は断面が円形となる。

Ⅰ期　型式が極端に少なくなる。篠壺Ⅳ(206)は壺L・Mと同様の口縁部をつけたものとなる。篠鉢Ⅱの口縁部の丸味は徐々にすたれ，新しい様相の211では，口縁部周辺を若干肥厚したものとなる。

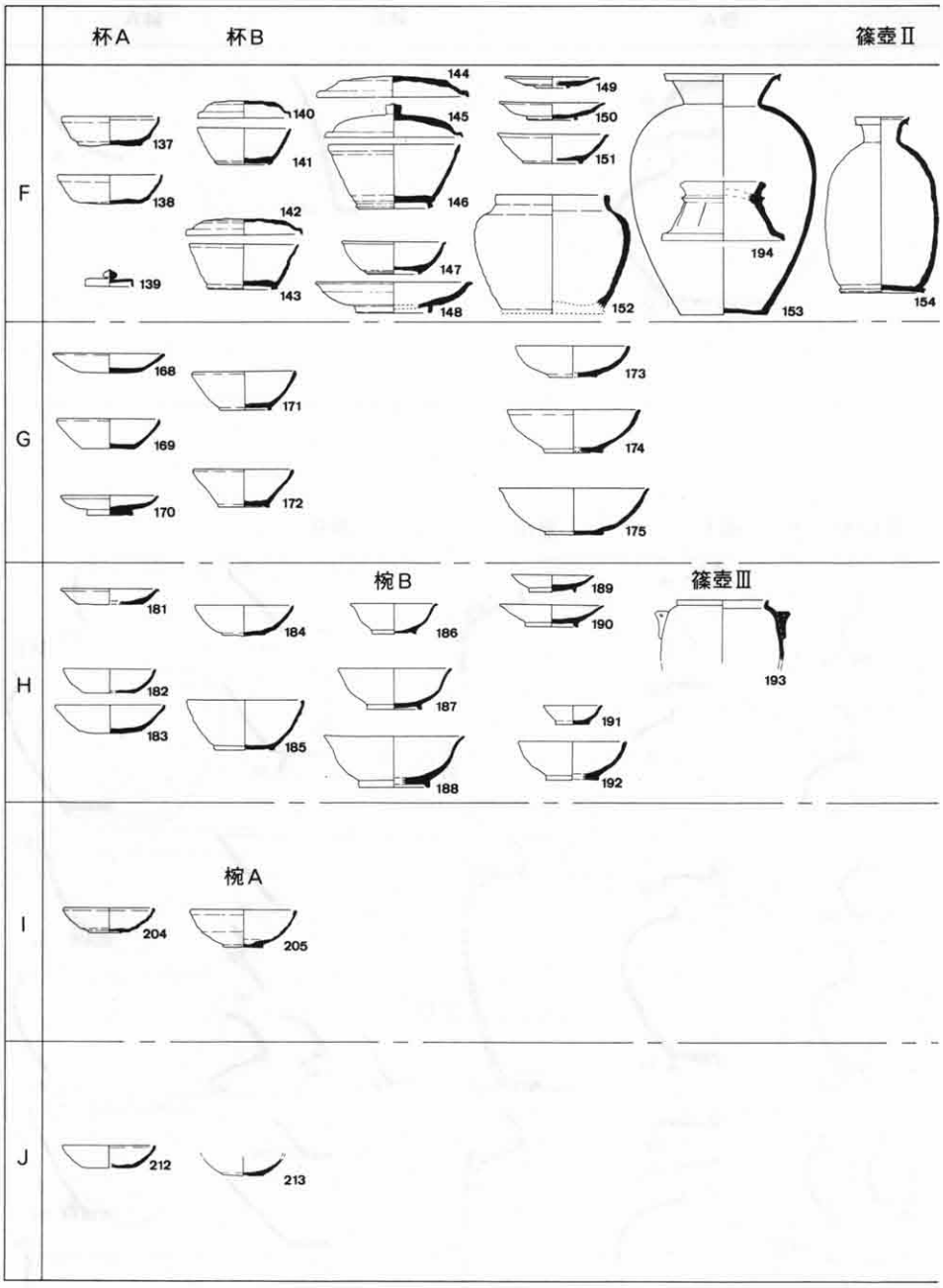
J期　窯の発掘例はなく表採資料をもとにしているので，検討を要する。椀・皿は縮小し，底部は前代に比して，口径に対して小さくなる。篠鉢Ⅱは，口縁部の外側を肥厚させたものである。プロポーションはシャープさを失う。



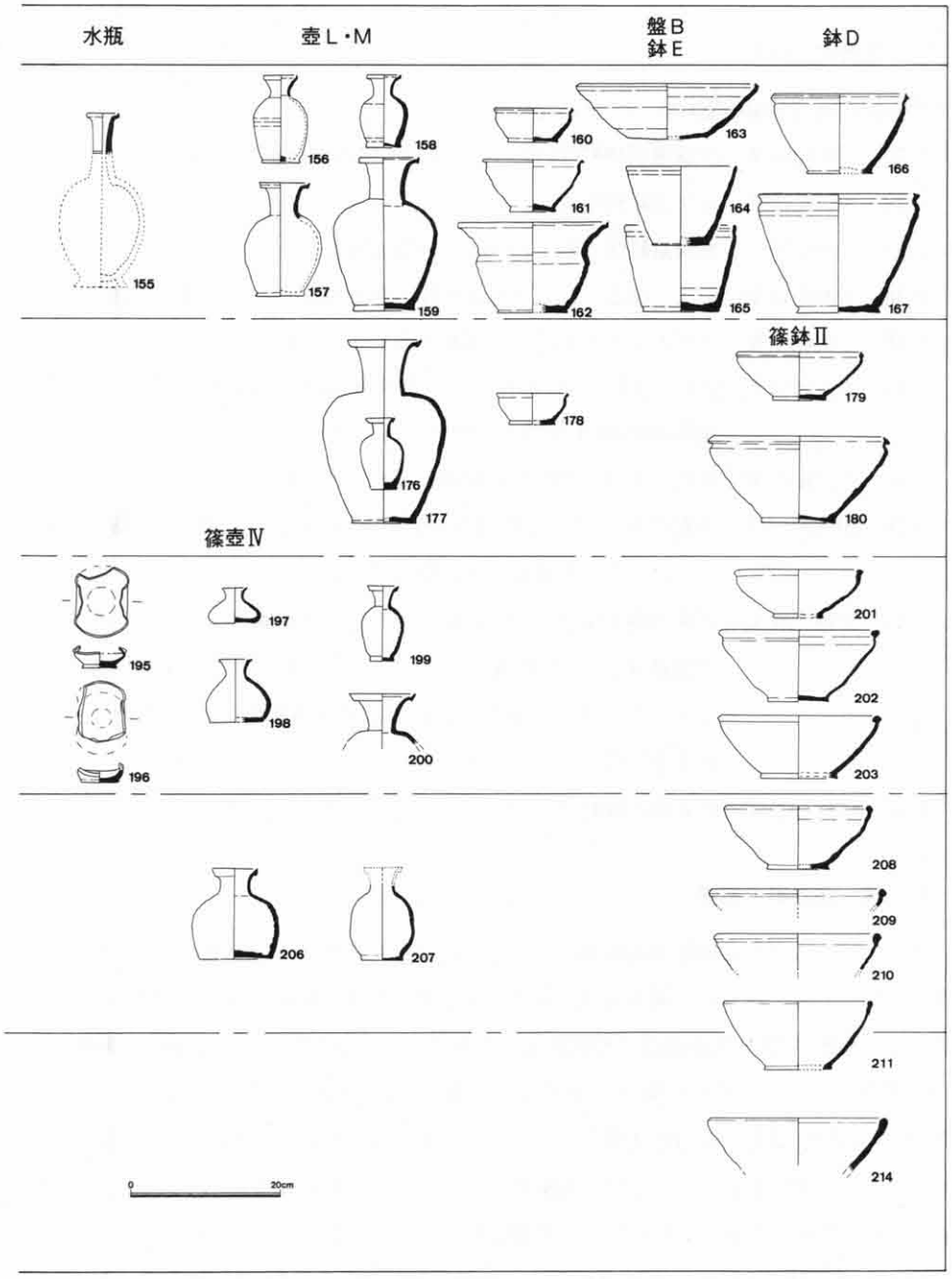
第２図　篠窯須恵器編年図(1)-A


壺A
鉢E
鉢A
29
30
31
32
33
壺L・M
壺E
壺N
盤B
56
57
58
59
54
55
60
61
62
63
64
椀鉢C
鉢D
鉢F
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
壺Q
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
耳皿

篠窯須恵器編年図(1)-B



第３図　篠窯須恵器編年図(2)-A


水瓶
壺L・M
盤B
鉢E
鉢D
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
篠鉢Ⅱ
176
177
178
179
180
篠壺Ⅳ
195
196
197
198
199
200
201
202
203
206
207
208
209
210
211
214
0
20cm

篠窯須恵器編年図(2)-B

3.　年代について

基本的には石井編年案[注7]によって年代を決定した。

A期　8世紀中葉　平城Ⅲ期[注8](略年代の1点750年)と同様と認定。

B期　8世紀後葉　未だ良好資料なし。

C期　8世紀末　長岡京時代[注9](784～794年)と同様と認定。

D期　9世紀前葉　前代と似るが，たとえば杯Bや盤B，鉢Dの口縁部変化で認定。

E期　9世紀中葉　年代の1点が判明した後葉の資料より古相。

F期　9世紀後葉　鉢D・壺Lと同様なのは，北野廃寺SK18・SK20[注10]にある。これらの遺構は884年火災時のものとされている。

G期　10世紀前葉　年代の1点が判明した中葉の資料より古相。

H期　10世紀中葉　平安京右京二条二坊SX1[注11]の資料の中に953年(天慶七)の墨書土器があり，これらの資料群と同様と認定。

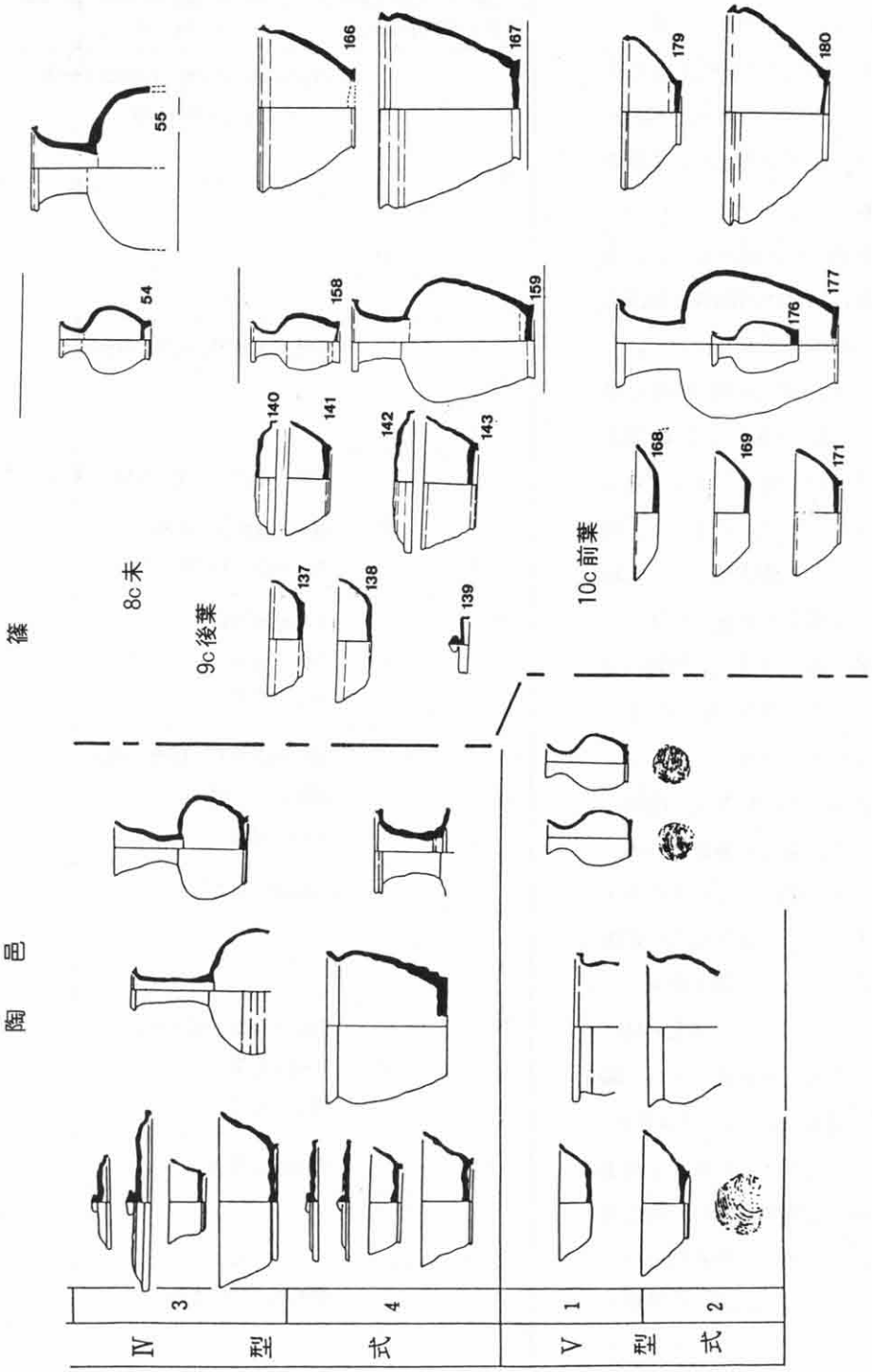
I期　10世紀後葉　従来の編年案では，西長尾5号窯を11世紀前半としていたが，これは篠鉢Ⅱ(211)を標識としていたためである。5号窯の主体はこれより一型式古い。主体の資料は薬師寺西僧坊天禄2(973)年火災層出土中[注12]にあり，年代を決定した。

J期　11世紀前葉　型式的に篠鉢Ⅱは新しく，ここに認定した。

4.　篠と陶邑窯の相違

さて，以上のように編年を再整備して呈示したわけであるが，この項では篠と陶邑の相違について考えてみたい。第4図[注13]はとりあえず必要な型式を抽出したものである。中村浩氏による陶邑Ⅳ型式3段階は『和泉陶邑窯の研究』[注14]などを参照すると，盤Aや鉢D(中村氏は甕としている上半分の破片)，杯Aなどは篠では長岡京時代に相当すると思う。陶邑Ⅳ型式4段階は鉢Dが高台を省略している点や壺L・Mの口縁部の形状，及び杯Bの形状からすると，篠のF期とした1群と重複するようである。陶邑Ⅴ型式1・2段階は，杯や鉢などから，篠のG期とした1群と一部重複するようである。

以上の並行関係を認めて話を進めると，陶邑と篠の違いは鉢D(後に篠鉢Ⅰ・Ⅱ)と壺L・Mに鮮明に認めうる。陶邑の壺L・Mは，口縁部の形状で2種あることがわかる。つまり，端部を上にひき出す(あるいは上下に肥厚)タイプと，肥厚せず外反し尖った感じで終わるタイプである。平城宮分類でも両者ともあり，分類上大差ないと考えられている。しかし，陶邑ではひき出すタイプはⅣ型式2段階からで，水瓶(長細頸壺)と同時であり肥厚



第4図　陶邑と篠窯(S=1/8)

しないタイプは古墳時代まで遡ることができる。つまり，壺L・Mには2系統あると捉えるべきなのであり，だからこそ，同じ生産地でも2種の口縁を作っていたのである。この新しい系統のものは，金属製品か，中国陶磁に祖源を求めるべきかもしれない。ところが，篠のC期(長岡京段階)の壺L・Mは，口縁部を上下にひき出したタイプのみである。この点によって，陶邑という古墳時代からの伝統的に須恵器を生産した地と，新興の篠との違いが明確になる。なお，壺M(瓶子)がもっともわかりやすい。

鉢Dは陶邑Ⅳ型式3段階においては篠と大差はないが，次の4段階になると体部下半が厚くなり，製作技術の退化が認められる。篠は薄手。

以上のように，壺L・Mには古系統と新系統があり，陶邑は両系統の違い(使用方法，目的の違いか)をずっと後まで厳然と理解していたのに対し，篠はすべて新系統の作り方をしており，違いを理解していなかったようである。しかし，技術的には高水準とな

付表1　篠窯跡群編年表

西暦	大期	小期	窯　跡　名など
8世紀	1	A	西長尾奥1-1号窯，石原畑3号窯 〃　2-1号窯(下層)
		B	
	2	C	西長尾1号窯，同地点SK06
		D	芦原1号窯，同地点SX01，同3号窯 西長尾A地区作業場 西長尾奥2-1号窯(上層)
9世紀	3	E	石原畑SK03 小柳1号窯 袋谷1号窯
		F	石原畑2号窯，同地点SD05 西前山1号窯 前山1号窯
	4	G	西長尾3号窯
10世紀		H	前山2号窯，同3号窯 小柳4号窯 黒岩1号窯
	5	I	西長尾5号窯
11		J	鍋倉3-1号窯(表採)

り，窯も増加する。陶邑は技術が退化し，窯も減少する。

さて，壺M(瓶子)が陶邑と篠とを区別する絶好の資料であることが判明したが，これをもとに平城京の製品(注15)をみてみると，陶邑タイプ(口縁部を丸くおさめる)ばかりである。ところが，長岡京段階になると，秋山浩三氏分類(注9aの文献)や百瀬正恒氏の分類(注9bの文献)によれば，ほとんどが陶邑タイプだが，若干篠タイプがある。これが，平安京になると圧倒的に篠タイプである。この傾向は9～10世紀の平城京跡でも同様である。

つまり，篠は長岡京造営時に都市への供給窯としての足がかりをつかみ，平安京造営以後は，その主力窯として稼働したことになる。

但し，緑釉陶器生産にみられるように，官窯的色彩を濃くもつものの，古墳時代から奈良時代にかけて陶邑が発揮したような，全国的に器形を斉一化するという力を持たなかったことは，律令体制の弱体化を如実に物語っていよう。むしろ，中世につながる特産品的な意味合いを付加した生産構造であったのだろう。

5. ま と め

筆者は最近，原型という概念(注16)を使用している。これはある地域で生産された独特の器形に対して使用しており，今回の例でいえば，壺Mの陶邑タイプが陶邑原型，篠タイプが篠原型となる。他に篠だけに限定すれば篠鉢Ⅱも篠原型鉢Ⅱとなる。篠原型が他の生産地に影響を及ぼした点はあまり見られないが，陶邑原型は播磨や東海地方など各地で認められ，それぞれで陶邑模倣型を生産していたようである。なお，原型と模倣型は，影響を与えた型式と与えられた型式ということであり，ある地域のすべての型式が原型とは限らない。

さて，このような特徴的な一群は篠や陶邑原型と把握したが，胎土の相違がみられることもあり，現段階では原型系と把握すべきで，生産地が確定した段階で○○原型と○○模倣型に分かれる場合と，○○原型の地理的範囲を広げて包括する場合とがある。

ともあれ，今回筆者が明らかにしたのは，壺の口縁部に注目すれば系統の違いがわかり，生産地(あるいは生産地系)が特定できるというものであった。そして，特に壺Mでは，平城京，長岡京，平安京という都市の歴史は陶邑から篠へという歴史とも符合しており，今まで想像するしかなかったその流れを，具体的に証明したつもりである。今後，他の型式をも含めて総合的に理解しなければならないが，各地の土器の原型を抽出する作業は地味で困難なものであり，今その先鞭をつけたにすぎない。この小文が土器研究者増につながるのなら望外の喜びである。

なお，本稿は当調査研究センターが1988年度から進めている共同研究「京都府の土師器と須恵器」の一環として開催した勉強会で発表した内容を骨子としている。この勉強会で

有意義なコメントをいただいたメンバーに感謝したい。

（いの・ちかとみ＝当センター調査第２課調査第２係主任調査員）

注１　a.宇野隆夫　「後半期の須恵器」（『史林』67巻６号）　1984
b.堤圭三郎　「亀岡市篠窯跡群」（『丹波史談』第112号　丹波史談会）　1982
c.水谷寿克・石井清司　「篠窯跡群について」（『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　日本中世土器研究会）　1986
d.百瀬正恒　「平安時代の緑釉陶器」（C文献に所収）　1982
e.日永伊久男　「近江産緑釉陶器の生産体制について」（『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会）　1988
f.橋本久和　「中世成立期の土器様相」（『日本史研究』第330号　日本史研究会）　1990

注２　注１aの文献より

注３　石井清司　「篠窯跡群出土の須恵器について」（『京都府埋蔵文化財情報』第７号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1983

注４　下記の文献の図をもとにした。
a.水谷寿克・石井清司・久保田健士・引原茂治・立花正寛・波多野徹・小島敏明・松元達也　『京都府遺跡調査報告書第２冊　篠窯跡群Ⅰ』　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1984
b.水谷寿克・石井清司・引原茂治・岡崎研一・立花正寛・広岡公夫・藤沢真澄『京都府遺跡調査報告書第11冊　篠窯跡群Ⅱ』　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989

注５　奈良国立文化財研究所編　『平城宮発掘調査報告』XI　1982

注６　伊野近富　「長沙銅官窯模倣須恵器について」（『京都府埋蔵文化財情報』第34号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

注７　注３文献に同じ

注８　西　弘海　「奈良時代の食器類の器名とその用途」（『土器様式の成立とその背景』　真陽社）　1986

注９　a.秋山浩三　「胎土からみた長岡京期の土器」（「長岡京跡左京第120次　発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集　向日市教育委員会）　1986
b.百瀬正恒　「長岡京の土器」（『長岡京古文化論叢』　中山修一先生古稀記念事業会）　1986

注10　a.堀内明博『北野廃寺発掘調査報告書』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983
b.堀内明博『北野廃寺発掘調査概報』　京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982

注11　平尾政幸　「平安京左兵衛府」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』　1978

注12　巽淳一郎「土器」『薬師寺発掘調査報告』　奈良国立文化財研究所　1987

注13　陶邑については下記の文献から抽出した。
a.中村　浩　『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981
b.中村　浩　『研究入門　須恵器』柏書房　1990

注14　注13aの文献

注15　注５の文献他多数。但し奈良時代のみ。

注16　下記の文献で概念規定，及び具体例を示している。
a.伊野近富　「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」（『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会）　1989
b.注６文献

伽倻前史を彩る文化遺産(2)
—韓国義昌・茶戸里(タホリ)遺跡第3・4次発掘調査略報—

李　榮勲

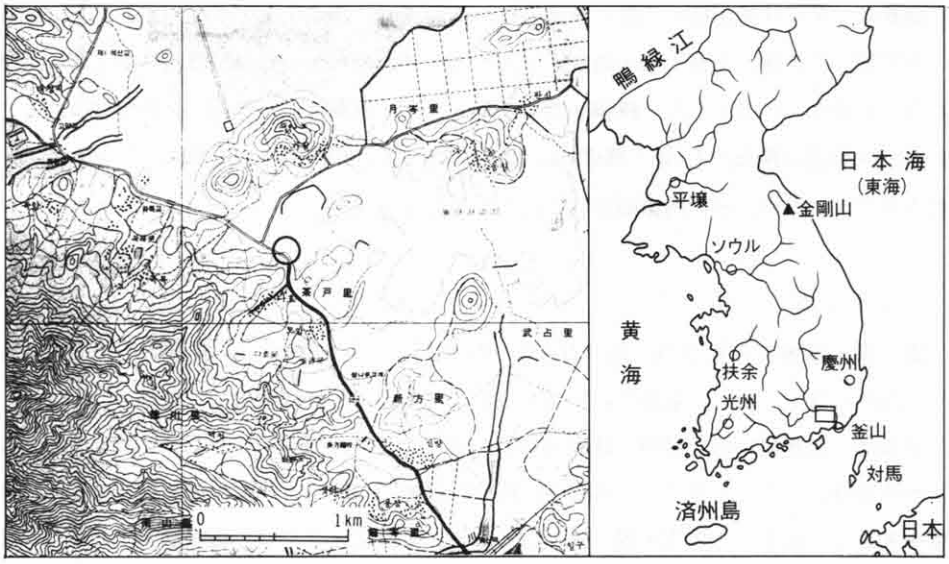
1. はじめに

国立中央博物館考古部では，慶尚南道義昌郡東面茶戸里遺跡に対し，1988年1月と3月に第1・2次発掘調査を実施したの(訳注1)に引き続いて，隣接地域の畑地一体で第3・4次調査を行った。第3次調査は1988年11月1日から12月10日まで，第4次調査は1989年3月30日から5月8日まで実施し，第3次調査では8基(第15～22号墳)，第4次では7基(第23～29号墳)，計15基の墳墓を調査した。これらは第1・2次調査で検出されたものと同様の性格を帯びている。以下，主要墳墓を中心に調査の概要を略述する。

2. 調査概要

(1)第15号墳

遺　構　すでに盗掘されていた墳墓で，墓壙の大きさは，長さ250cm・幅100cm・現深



第1図　遺跡位置図(左図中央マル印)

65cmで，東西方向に長軸をとる。墓壙底面に長方形の副葬坑を設けた類型に属し，木棺材は比較的良く残っていたが，盗掘により破壊・攪乱され，棺下の副葬坑まで徹底的に毀損されていた。しかし墓壙東半部の棺外では，漆器・土器などの副葬品の一部が原位置を保っていた。特異なことは，墓壙東壁と木棺東端面との間隙に長方形の漆塗板が立てられていた点である。木棺は形態上，第1号墳出土例と同様の半截刳抜木棺であり，やはり長方形の木製楔を用いて身と蓋を連結する構造をしている。

副葬品　漆器類では高杯・円筒形木製品・扇片・環・皿片・斧柄片などが出土したが，残存状況が大変悪く，漆皮膜しか残っていないものが大部分であった。高杯には長脚部に突帯を廻らしているものがあり，円筒形木製品のひとつには口縁部上端に朱線で三角鋸歯文が一条施されている。土器では，胴部に鈕が対称に付された断面三角形口縁の小形粘土帯土器と，瓦質土器・椀，無文土器片などが出土している。青銅製品としては，墓壙底面から攪乱状態で出土した剣鐔金具片があり，このほかに，副葬坑内には，毀損された竹籠片と，木の葉・果実種子・紐などが残っていた。

(2)第17号墳

遺　構　盗掘墳で，墓壙の大きさは，長さ230cm・幅90cm・現深160cmで，副葬坑が設置された第Ⅰ類型に属する。木棺材は残存していなかったが，腐植痕跡から観て，長さ約170cm・直径60cm以上の半截刳抜木棺であると推定される。さらに墓壙東壁からは，第15号墳と同様，漆塗板が寄りかかった状態で出土した。

副葬品　保存状態が極めて悪い漆塗高杯，筒形漆器，漆塗皿などが検出され，無文土器・牛角形把手付壺，瓦質土器・組合式牛角形把手付長頸壺・丸底短頸壺，椀形土器，貝殻状異形土器などが出土した。鉄製品には鉄斧3点と，副葬坑から検出した鉄製槌1点とがある。鉄製槌は現長約6cm・直径約3cmの大きさで，中央部には1.8cm×1.3cm程度の長方形の穴があり，その内側面には木質が付着していた。

(3)第18号墳

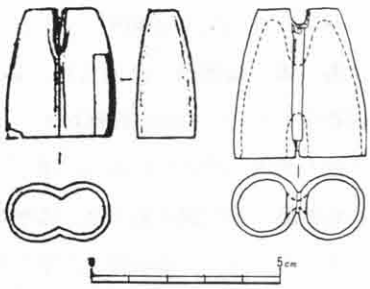
遺　構　墓壙の大きさが，長さ213cm・幅100cm・深さ90cmで，東西方向に長軸をとり，副葬坑は有しない。盗掘されてはいなかったが，木棺材は残っていなかった。

副葬品　副葬品には土器類と鉄製品類とがあり，墓壙南西隅で漆製品を納置した痕跡が1か所確認された。土器では，蓋を逆に被せた状態で，断面三角形口縁の粘土帯土器が南壁中央部から出土し，無文土器・鉢などもある。鉄製品としては，板状鉄斧1点，鉄鉾1点，及び用途不明の鉄製品類が一括出土し，現在保存処理中である。

(4)第19号墳（図版参照）

遺　構　墓壙は，長さ255cm・幅105cm・深さ150cmの大きさで，東西方向に長軸をとる。副葬坑をもち，盗掘でほとんど破壊されてはいたが，底面東半部と副葬坑は幸いにも攪乱されていない状況であった。東半部ほぼ中央に漆塗鞘銅剣１点が鋒部を東側にして置かれ，漆塗鞘上に有鉤銅器１点を若干傾けて配し，真横北側からは牛角形銅器・双頭管状銅器各１点が出土した。さらに漆塗鞘尻の横に漆製品１点が副葬されていた。副葬坑内からは，漆塗鞘鉄剣（？）１点，鉄鉾２点などの鉄製品と，帯状の漆製品１点などが出土した。このほかに西壁付近の底面から鋏刃部をもった鉄製品が１点採集され，東壁よりの底面から約80cm上面で鉄製品類が一括入り混じった状態で発見されたことは特異である。

副葬品　漆製品は，高杯２点をはじめとした漆器片が多数出土したが，保存状態が大変悪く，器形を判別できるものは殆んどなかった。副葬坑に埋納されていた帯状漆製品は，細い竹状のもので，「X」字形に組んだ後，その上に黒漆塗りする。鉄製品類には，副葬坑内から出土した鉄鉾２点と，漆塗鞘鉄剣と考えられるものが１点あり，鋏刃部を有した鉄製品は，第１号墳出土例同様，鋤と推定される。東壁寄り上面から検出された鉄製品類の一括は，現在保存処理中であるので，正確な種類などは不明である。青銅製品のうち，漆塗鞘銅剣１点は，把部は木製のため残存していなかったが，盤部両端に嵌め込まれた半円形の銅製金具２点，及び粟粒文銅製剣把頭飾が伴出している。漆塗鞘には飾金具がなく，恐らくは鞘口に銅製鐔金具が嵌め込まれていたのであろう。銅剣はＩ型式に属する。有鉤銅器と牛角形銅器は梨花女子大学校博物館所蔵の伝尚州出土品（訳注２）と同一形態で，双頭管状銅器は，慶尚南道三千浦市馬島洞遺跡（訳注３），長崎県対馬の峰町サカドウ遺跡（訳注４）と豊玉町唐崎遺跡（訳注５）などの出土例と類似している。



第２図　日本出土の双頭環状銅器
（左：サカドウ遺跡，右：唐崎遺跡）

(5)第20号墳

盗掘墳で，墓壙の大きさは，長さ243cm・幅80cm・深さ85cmで，東西方向に長軸をとる。副葬坑は認められない。

副葬品としては，漆製品の痕跡が北壁中央付近で確認され，その横から丸底短頸壺１点が出土した。墓壙南西隅からは長方形透孔を４か所廻らした瓦質土器台付壺が１点発掘された。鉄製品類では，墓壙東半部で鉄剣１点，鉄斧１点，及び鉄鉾片１点などが確認されている。

(6)第22号墳

盗掘墳で，墓壙は，長さ245cm・幅100cm・深さ140cm程度の規模で，やはり東西方向に長軸をとる。副葬坑が穿たれている。

副葬品としては，漆製品の痕跡が確認され，組合式牛角形把手付長頸壺や小形椀などの瓦質土器類があり，そのほかに副葬坑内出土の鉄器片と，墓壙東壁側から出土した砥石1点がある。

(7)第23号墳

遺　構　盗掘墳で，墓壙の規模は，長さ234cm・幅114cm・深さ45cmを測り，東西方向に長軸をとる。比較的浅く幅広い形をなし，木棺材は残っていなかったが，土層観察や遺物配列状況などから観て，木棺の大きさは，長さ200cm・直径60cmぐらいと推定される。副葬坑は有していない。

副葬品　盗掘坑内部の精査途中に，板状鉄斧，鉄剣などの鉄製品類と，剣把の盤部両端に嵌め込まれた青銅製飾金具が1点採集され，墓壙内東半部の底面中央付近から板状鉄斧2点，南壁東側から鉄鉾3点など，計20余点の鉄製品が出土した。土器類では，墓壙北西隅から組合式牛角形把手付長頸壺が1点発掘され，漆製品は，西壁側と北壁中央部などで痕跡のみが確認されたにすぎない。

(8)第24号墳(図版参照)

遺　構　盗掘墳ではあるが，墓壙の大きさは，長さ275cm・幅85cm・深さ120cmで，副葬坑をもつ。木棺の底部材が一部残存し，その形状及び土層観察から推して，半截刳抜木棺の使用が認められるが，第1・2・15号墳とは異なり，木製楔は確認されていない。

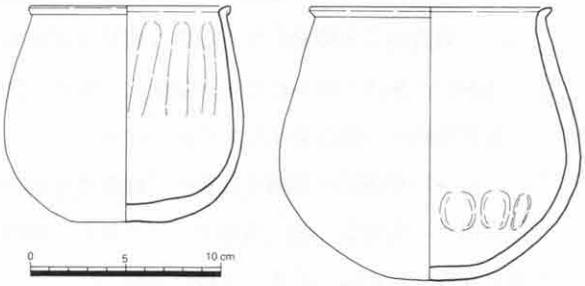
副葬品　棺内副葬品には，漆塗鞘1点，漆塗扇1点，漆塗鞘剣(粟粒文銅製剣把頭飾付)1点などがあり，漆塗鞘は，第1号墳出土例と同一形態であるが，鞘の表面に2条の透彫りされた部分が認められ，特異である。また漆塗鞘剣は，鞘の形態が前者とは異なり，長方形である点が特徴である(装着された剣が，銅剣であるか，鉄剣であるかは未確認)。そのほかに，棺外副葬されていた漆製品には，高杯，皿，円筒形容器などがあり，副葬坑内からは斧の柄(全体の1/3ぐらい漆塗されている)1点が確認された。土器類では，西壁に接して組合式牛角形把手付長頸壺が2点出土した。副葬坑内からは鉄斧1点と短鋒銅鉾1点が検出され，墓壙東壁と木棺の東端面との間隙には砥石が2点納置されていた。

(9)第25号墳

遺　構　盗掘墳である。墓壙は，長さ250cm・幅85cm・深さ120cmの規模で，長軸を

東西方向にとり，副葬坑はない。木棺材は残存していなかったが，やはり半截刳抜木棺を納置していたものと推定される。

副葬品　漆製品は棺外の所々で痕跡のみ確認できた。土器類は東壁側から平底の瓦質土器・小形甕1点と，東半部北壁に接して丸底短頸壺1点，西半部南壁側から瓦質土器・小形椀などが4点出土した。鉄製品では，上記した椀形土器の下側から環頭刀子が1点，南壁中央部付近から鉄鉾片と小形鉄鎌が各1点検出された。



第3図　茶戸里遺跡出土丸底短頸壺出土例
(左：第9号墳出土無文土器，右：第10号墳出土瓦質土器)

(10)第26号墳

墓壙の大きさは，長さ235cm・幅85cm・深さ100cmで，東西方向の長軸である。盗掘墳で，木棺材は残っていなかった。

副葬品には瓦質土器椀と丸底短頸壺各1点があり，銅製鐔金具が付いた鉄剣片が墓壙東半部北壁近くで出土し，このほかに鉄鉾・鉄製鉈などが発見された。

(11)第29号墳

遺　構　盗掘墳である。墓壙の規模は，長さ250cm・幅150cm・深さ160cmを測る。東西方向に長軸をとり，副葬坑は確認されなかった。木棺材は残ってはいなかったが，やはり半截刳抜木棺を使用していたものと推定される。

副葬品　漆製品は残存状況が非常に悪かったため，器形は殆ど確認できなかった。わずかに，東壁との間隙に丸底短頸壺に類似した漆器などが置かれていたり，西側壁からは漆塗蓋などの漆器が出土したにすぎない。土器類では，瓦質土器・小形椀が3点出土し，縄席文が施された瓦質土器片及び牛角形把手付無文土器片などが攪乱土内から採集された。鉄製品では，南壁側から鉄斧1点，盗掘坑から環頭鉄刀子片1点を収集した。

3. おわりに

以上，簡略にすぎないが，第3・4次調査の概要を述べてみた。現在，出土遺物の整理作業が完了していない関係上，正確な事実内容は把握できないが，上記した墳墓の概略的

性格は，第１・２次調査のそれと酷似した様相を示している。

今回の調査で新たに確認できた成果は，以下のとおりである。

1. 我国では初めて有鉤銅器・牛角形銅器・双頭管状銅器などが本格的な発掘調査で出土し，対馬地方と関連して，重要な資料と評価できる。
2. 漆製品で朱漆で描かれた三角鋸歯文が初めて発見されたことで，この地域の漆製品の製作技術の一断面を示してくれている。
3. この茶戸里遺跡の発掘では初めて縄席文を施した瓦質土器が確認された。また瓦質土器類でも丸底壺・椀・台付壺などの新しい器形が多数認められ，瓦質土器の研究に良好な資料が追加されることになった。

このほかに，第15号墳が位置する233-3畓で試掘を行った際，トレンチの断面に，時期・時代は不明ではあるが，水田遺構の可能性が指摘されており，今後の調査が待たれる。

（李　榮　勲＝韓國　國立慶州博物館學藝研究官）

（訳・松井忠春＝当センター調査第１課資料係主任調査員）

《訳者付記》　本報文は，『博物館新聞』第215号(1989年７月１日発行)に掲載されたものである。すでに紹介したように(訳注６)，茶戸里遺跡の発掘調査は，韓国考古学界のみならず，日本の古代文化を考究する上で，重要な成果をもたらした。その概要は，訳注１の文献として刊行され日本語本も出版された。併読して頂ければ幸いである。今次の調査は，前調査の補完的性格をも帯びてはいるが，遺跡全体を分析・考察するに必要欠くことのできないものと考え，本原文の訳出を李榮勲先生にお願いしたところ快諾して頂き，遺構写真まで送付賜った。末尾ではあるが，謝意を表します。

訳注１　李　健茂・李　榮勲・尹　光鎭・申　大坤「義昌茶戸里遺蹟發掘進展報告(Ⅰ)」(『考古學誌』第１輯，ソウル，1989)

訳注２　梨花女子大學校博物館編『博物館所蔵品目録』(梨花女子大學校出版部，ソウル，1987)

訳注３　沈　奉謹・鄭　聖喜「東亜大學校博物館所蔵青銅遺物新例」(韓國大學博物館協會編『古文化』第20輯，ソウル，1982)

訳注４　長崎県教育委員会編『対馬―浅茅湾とその周辺の考古学調査―』(『長崎県文化財調査報告書』第17集，長崎，1974)

訳注５　九州大学文学部考古学研究室編『対馬―豊玉村佐保シゲノダン・唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告―』(長崎県教育委員会『長崎県文化財調査報告書』第８集，長崎，1969)
訳注４にも再録されている。

訳注６　李　健茂・松井忠春訳「伽倻前史を彩る文化遺産―韓国義昌・茶戸里遺跡発掘調査概報―」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号，京都，1989)

平成２年度発掘調査略報

1. 山形古墓群第２次

所 在 地　熊野郡久美浜町大字大井小字山形

調査期間　平成２年４月12日～６月14日

調査面積　約400m²

はじめに　山形古墓群は，東から西にのびる丘陵の頂部及び南斜面に分布する中世古墓群である。第１次調査では丘陵頂部に位置する７基の中世火葬墓を確認した。今年度の調査は，丘陵南側斜面で，さらに火葬墓が多数存在するものと予想されたため，拡張調査を行うこととした。なお，本調査は，農林水産省近畿農政局が計画推進している「丹後国営農地開発事業」の大井団地造成にともない同局の依頼を受けて実施した。

調査概要　中世墓　今回検出した中世墓は，昨年度検出したものも含めると総数25基前後になると考えられる。この中には火葬骨埋納用の小土壙を掘り，上部に拳大～人頭大の石材を約１m四方の範囲に配するものと，集石は行うが下部に土壙等の施設を持たないものがある。後者については，火葬骨等が検出されない場合があったため，墓かどうか厳密に区別し難い。また，これら集石中からは五輪塔の断片や板碑なども出土しており，本来はこれらが供養塔として立てられていたものと推測される。

荼毘跡(SX21)　丘陵東側の狭い平坦地に位置する平面長楕円形の小土坑である。土坑の周壁面は，焼けて赤色酸化層を形成する。土坑底部には炭とともに火葬骨が残存しており，火葬に伴う施設と考えられる。遺物は出土していないが，中世火葬墓に関連するものと見られる。

この他，丘陵南側の平坦地で２基の近世土葬墓を検出した(SX01・02)。座棺を埋葬したと考えられる。SX02では，底部付近で棺材の一部と，きせる・漆椀・銅銭等の遺物が出土した。

ま と め　以上今回の調査では，中世火葬墓群と，近接して荼毘跡と考えられる小土坑を確認した。これらの時期は，出土遺物に乏しく決し難いが，わずかに出土した土師皿等からみて13世紀頃と見られる。同一地点で火葬施設と埋葬施設を確認できたことは，中世における当地域の葬制を考える上で貴重な成果である。　（森　　正）

第１図　調査地位置図（1/50,000）

2. 杉 末 遺 跡

所 在 地　宮津市大字杉末

調査期間　平成２年５月24日～６月12日

調査面積　約150m²

はじめに　今回の調査は国道176号バイパスの道路改良工事に先立ち，京都府土木建築部の依頼を受けて行った。

杉末遺跡は，宮津湾を臨む丘陵先端部に位置する。京都府教育委員会作成の『京都府遺跡地図』には古墳時代から奈良時代の遺物散布地として記載されている。また，今回の調査に先行し実施された試掘調査においても，古墳時代から中・近世にわたる土器片が出土している。

調査概要　調査は京都府教育委員会の試掘か所を中心にして，「L」字形のトレンチを設定した。最初，重機により遺構・遺物の有無を確認しながら掘削した。しかし，表土下約2.5mまで掘り下げたが，顕著な遺構・遺物は見られず，表土下約80cmから植物遺体を含む黒褐色粘質土が厚く堆積していた。さらにその下層は灰褐色砂層が続くと思われる。土層観察によると，トレンチの西および北隅で旧地形の山裾を示す傾斜面が確認され，これらの土はこの谷状地形に堆積した堆積土であることが判明した。一方南北のトレンチでは表土下約80cmの暗灰褐色砂質土中から土師器・須恵器片が出土したため，途中から人力で掘削したが，遺物の大半は流入による摩滅した細片で，これらに伴う遺構は見られなかった。

ま と め　今回の調査は谷の末端部であったため，顕著な遺構・遺物は確認されなかったものと思われる。今回の成果は，旧地形が谷状地形を呈していたことがわかったことである。

以上により本来の遺跡の中心は調査地より上部の小台地上に存在しているものと思われる。

（柴　　暁彦）

調査地位置図(1/50,000)

3. 里　遺　跡

所 在 地　綾部市里

調査期間　平成２年４月24日～６月20日

調査面積　約500m²

はじめに　今回の発掘調査は府道建設に伴い，京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。昨年度からの継続調査で，昨年度はA・B地区を対象とし，今年度はC地区を対象として調査した。A・B地区では，古墳周溝の一部，奈良時代・鎌倉時代の掘立柱建物跡等多数の遺構とそれに伴う遺物を確認した。A・B地区については本紙36号で概略を記したので参照されたい。C地区はこれらに隣接しており，関連する遺構の存在が予想された。

調査概要　C地区はB地区の南側に設定した調査地区である。調査地内に宅地が残っていたため「L」字形のトレンチを設けて調査にあたった。この地区の北半部はB地区同様に宅地や畑地として利用されていたため，削平と攪乱が著しく，遺構はほとんど残存していなかった。南半部は傾斜地であり，再堆積土と盛土のため包含層と遺構の遺存状況は良好であった。検出遺構は掘立柱建物跡１，土坑７，溝３，ピットである。

掘立柱建物跡は南北２間以上の規模をもつが，部分的に検出したにすぎず，全体の規模・性格は明らかでない。土坑は４基が円形で，近世に掘削されたものである。残りの３基は楕円形の不定形なものである。土坑内から瓦器椀の細片が少量出土している。

溝は４条のうち，３条は浅く皿状の断面を有するもので，いわゆる素掘り溝である。遺物が出土しておらず，時期不明である。残りの１条は東西に走る溝で，SD01と名付けたものである。幅約2.6m・深さ約１mを測り，断面は台形を呈する。16mにわたって検出した。下層から平安時代の須恵器杯身・皿・瓶・墨書のある木札などが出土し，上層からは鎌倉時代の土師器皿などが出土している。平安時代半ば頃に開削され，鎌倉時代にかけて機能していたと考えられる。

SD01は里遺跡の南限にあたり，微高地縁辺部を横切って配置されていることから，区画溝としての機能を有しているものと考えることができる。　（田代　弘）

調査地位置図(1/50,000)

4.　京大北部構内遺跡

所 在 地　京都市左京区北白川西蔦町27

調査期間　平成２年４月23日～６月11日

調査面積　約225m²

はじめに　今回の発掘調査は，京都府警察本部の依頼を受けて，警察職員待機宿舎の建設に先立って実施したものである。

京大北部構内遺跡は，昭和48年以降数回にわたり発掘調査が行われ，縄文時代から中・近世にかけての集落跡や墓地などが確認されている。特に，付近は北白川上終町遺跡・北白川小倉町別当町遺跡・北白川追分町遺跡などの著名な縄文時代の遺跡が分布する地域でもある。これらの遺跡は，比叡山西南麓に発達した複合扇状地のうちの，北白川扇状地上に立地した集落跡である。

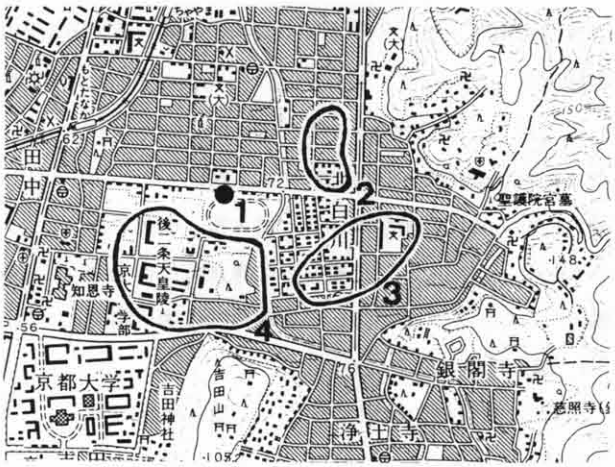
調査概要　調査は，表土以下黒色土上面までを重機によって掘削し，黒色土層以下礫層までを人力によって掘削した。基本的な層序は，表土(約30cm)・茶褐色土(約40cm)・黒色土(約50cm)と続き，黒色土から礫層までの間に約160cmの砂層が堆積していた。

遺物は，茶褐色土および黒色土の掘削中に土師器や須恵器・中近世の陶磁器・縄文土器などの細片が少量出土した。砂層の掘削では，遺物を検出することはできなかった。

遺構は，黒色土上面を精査した際に，南北方向の素掘り溝４条を検出した。土師器や須恵器の細片が若干出土しており，平安時代頃の溝と思われる。

ま と め　今回の調査では，顕著な遺構・遺物を検出することはできなかった。近接する京大北部構内の調査によると，調査地点周辺は，北白川扇状地の末端部にあたり，基盤の白砂および礫層が東から西へ向けて急激に下がる地形となっている。当調査地も同様の地勢下に位置していることが確認できた。

（三好　博喜）



第１図　調査地周辺主要縄文時代遺跡分布図(1/25,000)

１：調査地　　２：北白川上終町遺跡
３：北白川小倉町別当町遺跡　４：北白川追分町遺跡

資　料　紹　介

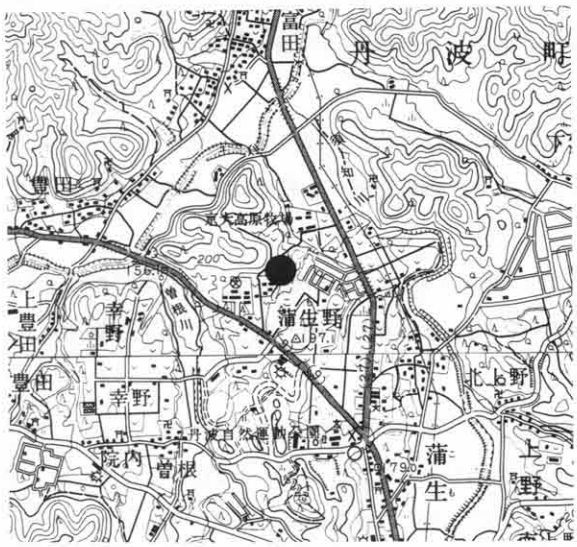
丹波町蒲生窯跡の須恵器

森　　正・松　室　孝　樹

1. はじめに

ここで紹介する資料は，京都府丹波町字蒲生野において採集したものである。1988年2月，府立須知高校敷地内で蒲生遺跡第3次発掘調査を行っている際，学校関係者から農場の東にある八ツ谷池に多量の須恵器が以前より散布しているとの連絡を受けた。(注1)

現地は，八ツ谷池の南端であるが，この池は谷を堰留めて作った溜め池であり，本来は丘陵に挟まれた谷筋の奥で北東に張りだした丘陵の先端部にあたる。池の侵食によってできた1mほどの崖面と池の中には多量の須恵器の散布とともに，炭を含む黒色土が見られた。その範囲は，約40mにおよぶ。採集した須恵器のなかに数個体が融着しているものが存在する点や，窯壁の破片も散布している点から窯跡であると判断できる。また，池の中に見られる黒色土は灰原に伴うものと考えられ，窯体は，丘陵斜面に残存していると推定される。窯体の位置，基数等は明確ではないものの，散布状況等から考えて，単独ではなく数基からなるものであろう。



第1図　位置図1 (1/50,000)

第2図　位置図2 (1/2,000)

なお，今回は採集遺物のうち，時期あるいは器種の判別できるものを可能なかぎり図化し，今後の基礎資料となるよう努めた。本文は，1・3を森が，2を松室が執筆した。資料の実測は，森と高野陽子(同志社大学大学院生)が行い，図面の浄書は松室が行った。

2. 採集遺物の概要

採集された遺物は総数38点，そのうち24点を図化し得た。器種構成としては，杯G・杯G蓋・杯H・長頸壺・短頸壺・甕がある。

杯G蓋(第3図1～5)　復原口径は最小(2)で9.4cm，最大(3)で11.6cmを測る。形態的には，平らな天井部から緩やかに外反しながら口縁端部に至る。単部は丸くおさめる。かえりは短く下方につまみだし，口縁端部より下方に突出するものはない。また，かえりの端部には鋭いものと丸みをおびるものとに分けられる。調整は天井部位外面に回転ヘラケズリ調整，体部外面下半および内面には回転ナデ調整が施されている。焼成は，4が灰白色を呈し，焼成は甘いが，それ以外は堅緻である。

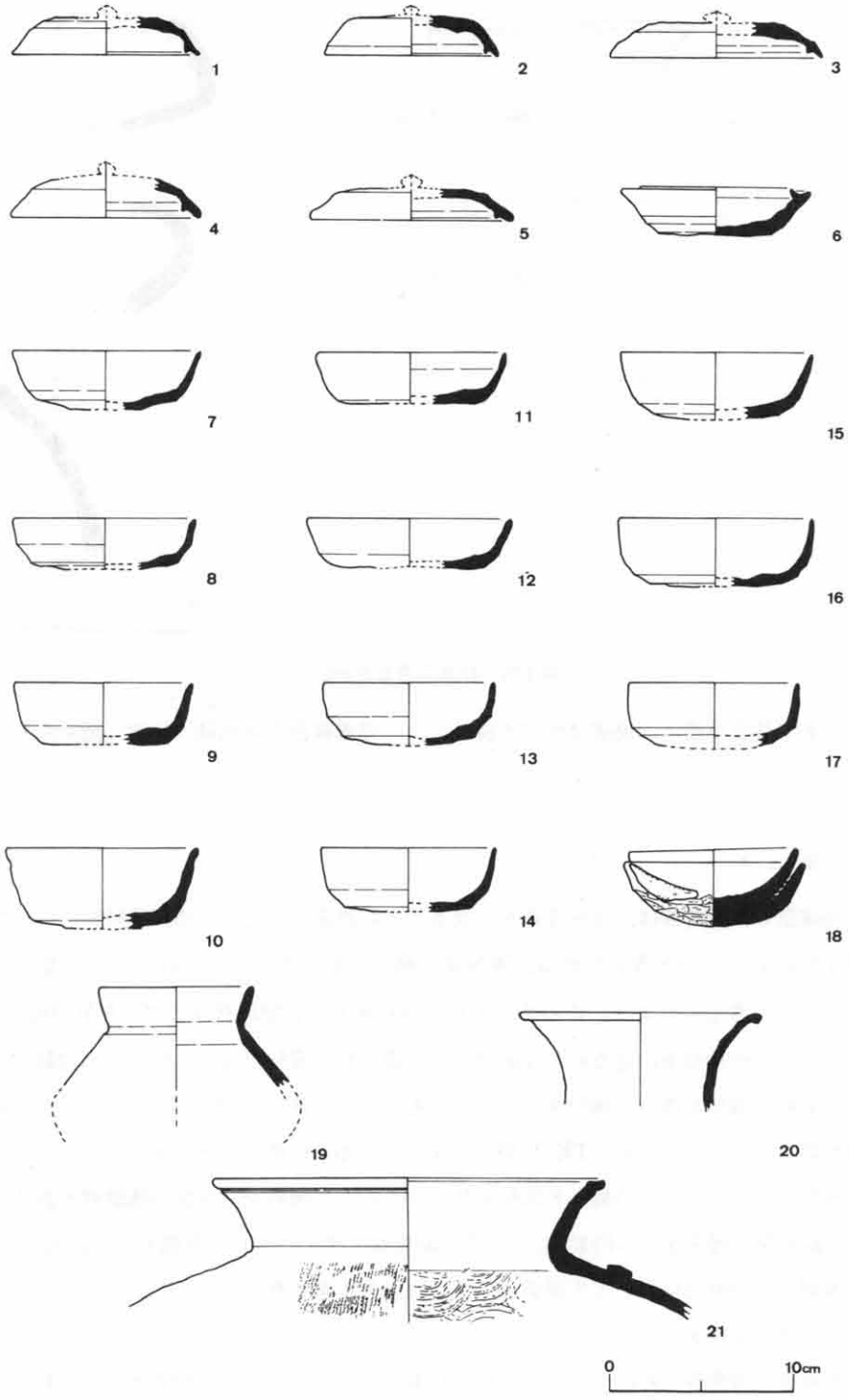
杯H(第3図　6)　復原口径10.4cm，器高2.6cmを測る。立ち上がりは短く内傾し，受け部上端よりやや上方へ突出する。受け部は外上方にのび，端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ切り後未調整である。焼成は堅緻で暗灰色を呈する。

杯G(第3図7～18)　復原口径は最小(13)で9.2cm，最大(10・15・16)で10.4cmを測る。形態的には体部から底部にかけての屈曲が明確でなく丸みをおびるもの(18)，緩やかに屈曲するもの(7～9，11～17)，器高が高く明確な屈曲部がみられるもの(10)，という三種に細分することが可能である。内外面ともに回転ナデ調整を施し，底部外面はヘラ切り後未調整のものが大半である。また18は，3個体が重ね焼きの状態で融着しているもので，底部に手持ちのヘラ削りを行う。

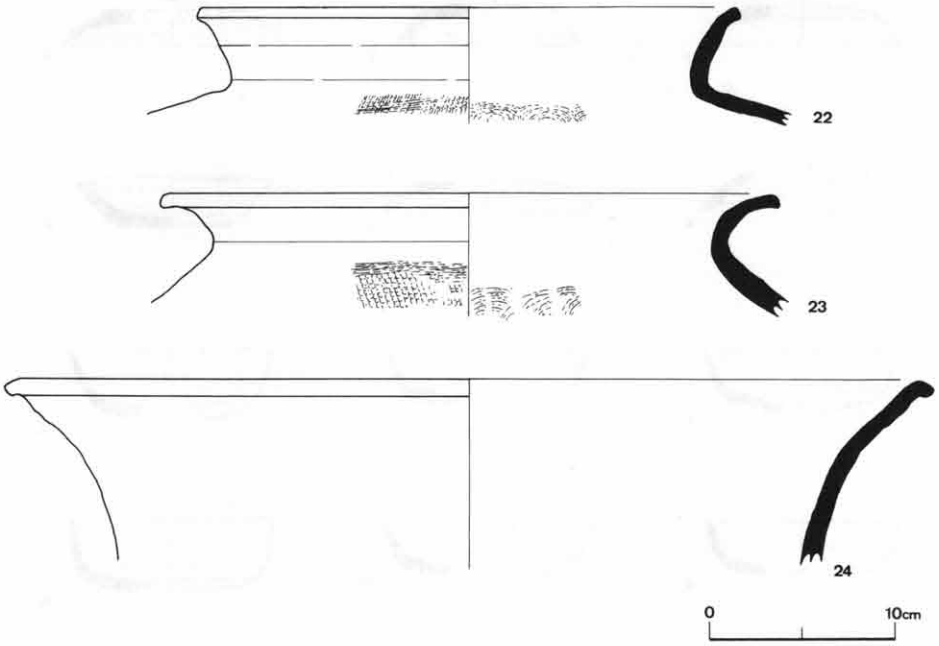
短頸壺(第3図　19)　復原口径8.4cmを測る。口縁部と体部の境には強いナデを施すことによって段をなす。調整は内外面ともに横ナデ調整を施す。外面には自然釉の降着が認められる。

長頸壺(第3図　20)　口縁部の破片で，復原口径は13.0cmを測る。直立気味の頸部から外反しながら口縁部へのびる。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横ナデ調整を施す。

甕(第3図　21～第4図　24)　復原口径21.2～32.4cmを測るもの(21～23)と，50.4cmを測る大型品(24)がある。21の端部は水平方向につまみだし，ややくぼむ面をなす。また，直径1.5cmの円盤状の粘土粒を貼りつける。22～24の口縁端部は外傾する面をなす。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ調整するが，体部外面には平行タタキを行い，内面には同



第3図　採集須恵器実測図1



第４図　採集須恵器実測図２

心円のあて具痕が残る。焼成はすべて良好で，一部濃緑色の自然釉の降着が認められるものもある。

3. まとめ

今回確認した窯跡群は，２～３基からなることが推測される。その操業時期については７世紀代にあるものと考えられる。陶邑窯の編年に対応させるならば，TK217型式に併行するものと考えられよう。この中で１点のみ採集した古墳時代タイプの杯Hが他の杯Gとどういった併行関係にあるのかは表採という限られた資料でもあるので，当地域内での今後の資料の増加を待って検討すべき点である。ただ，蓋（４・５）などは，かえりも短く器高も低くなっているため，TK217型式の中でも新相に位置づけられよう。(注２)

丹波町内においてはこの他，８世紀後半を中心として操業を行う院内窯跡群がある。蒲生窯と院内窯が操業を行う時期は，それぞれ須恵器生産上の大きな画期として認められる。この画期に，同町内において小規模ながらも須恵器生産が断続的に行われていることは，非常に示唆的な事実と言えよう。

丹波地域の須恵器生産については，林　和廣・杉原和雄・山田邦和各氏による先行研究があり，資料の集成・紹介がなされている。(注３) これらの先行研究をふまえ，７世紀代の丹波

・丹後地域の須恵器生産の状況をみても，資料に乏しくその実態は，不明な部分が多い。しかし，当窯跡が操業を行う時期は，丹波地域においては園部窯の再興，北丹波の夜久野町末窯の生産開始等が認められ，丹後地域においても大宮町新宮窯で生産が行われるなど，須恵器窯の分布が広がっていく時期でもあり，府内の大きな動向のなかで成立したものといえよう。

以上のように，表採資料という限られた資料ではあるが，丹波地域内にとどまらず，府内の須恵器生産を考えていく上でも重要な資料であると言える。

最後に，今回の報告を作成するに当たり当時京都教育大学の学生であった高野陽子氏をはじめ学生諸氏には多くの協力を得た。記して感謝の意を表します。

（もり・ただし＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

（まつむろ・たかき＝京都教育大学学生）

注１　２月に森は，高野陽子・大崎康文の両君とともに，八ツ谷池周辺の踏査を行い，現地を確認した。

注２　山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」（『古代文化』40-6　(財)古代學協會）　1988，6

注３　林　和廣「丹波国古窯跡について」（『史想』第15号　京都教育大学考古学研究会）　1970，6

杉原和雄「京都府北部の須恵器生産」（『丹後郷土資料館報』第２号　京都府立丹後郷土資料館）　1981，3

山田邦和「京都府下の須恵器窯」（『マムシ谷窯址発掘調査報告書』　同志社大学校地学術調査委員会）　1983

資　料　紹　介

綾部市馬場池東方遺跡出土遺物について

田　代　　弘

1.　はじめに

当センターでは，1988年に近畿自動車道敦賀線敷設工事に先立って綾部市馬場池東方遺跡の発掘調査を実施した。この調査では，所属時期の明らかでない土坑を一基検出したのみで遺構の広がりを確認することはできなかったが，包含層から土器・石器類を検出し，かつて遺構が存在していたことを裏付ける資料を得た。遺物の出土量はわずかであったが，この中には縄文時代晩期の深鉢形土器，弥生時代前期の壺形土器などが含まれていた。(注1) 当遺跡の位置する福知山盆地では，この時期の遺物の発見例が少ないだけに，(注2) これらの資料的評価は高いと思われる。小稿では，この資料を取り上げて報告する。

第１図　遺跡位置図(1/50,000)

2.　遺跡の位置と立地

馬場池東方遺跡は，綾部市私市東町に所在する。私市東町は，綾部市街地の西方約５kmにあり，由良川右岸の段丘上に営まれている。この集落の西側には狭隘な谷が開けており，谷水田となっている。谷の中ほどに農業用水確保のために設けられた馬場池と呼ばれる溜め池がある。遺跡は，この池を南に望む標高約70mの丘陵上に位置している。この場所は，私市東町の現集落から見ると北西方向の山中にあたる。遺跡の立地面と隣接する谷部との比高差は約20m，現在耕作地として利用されている段丘面との比高差は約40～45mを測る。

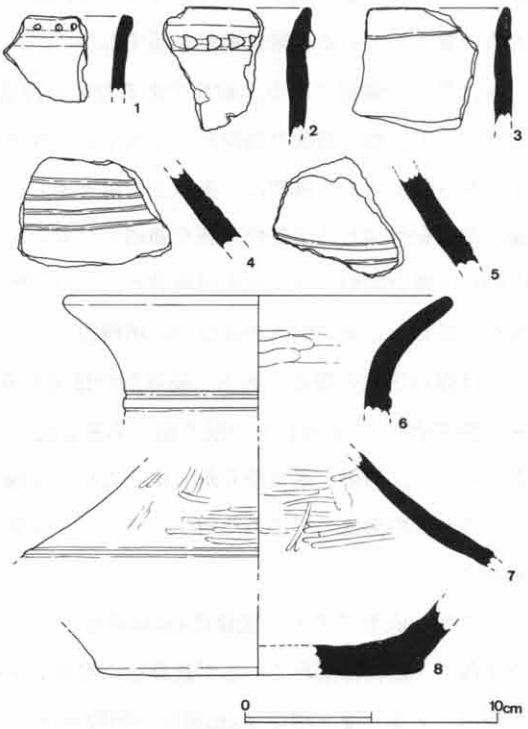
当遺跡は，可耕地と遠く離れた高所に立地しており，この点に特徴をみることができる。

3. 出土遺物について

遺物は整理収納箱3箱分出土している。本稿で紹介する遺物の他に，古墳時代の須恵器杯身・蓋(TK47～MT15)・須恵器甕・土師器甕，奈良・平安時代の須恵器杯などの土器とサヌカイト製削器，敲石，磨製石斧未製品などがある。

縄文土器・弥生土器は，馬場池に面する調査第Ⅱ区から出土した。

縄文時代晩期の土器(第2図1～3)3点出土している。いずれも深鉢形土器で，口縁部の一部のみが遺存している。口縁端部直下に凸帯を有する点で共通している。



第2図　出土土器実測図

1は，粘土の付加はわずかで，主に凸帯下端へ強いナデを加えて凸帯を作出する。凸帯上に棒状工具先端を用いて刺突文を施す。調整には内外面ともナデを加える。器体外面に煤が付着している。径1mm前後の砂粒を中心に微細砂を多く含む。淡橙褐色を呈する。

2は，凸帯を口唇部に接して付加しているが，凸帯上端を強くヨコナデするため凸帯頂部が下端に寄っている。凸帯下端は未調整に近い。凸帯上に「D」字形の刻み目を施す。内・外面ともナデ。器体外面に煤が付着している。砂粒の混入が多く，胎土は粗い。暗赤褐色である。

3は，口縁端部に接して粘土帯を付加する。粘土帯上を強くナデ調整するため，粘土帯は扁平である。下端は未調整に近い。器体内外面ともナデ調整。器体外面にのみ煤が付着している。径1mm前後の砂粒の混入が著しく，胎土は粗い。暗褐色を呈する。

1～3の胎土に含まれる砂粒は，石英・長石・ウンモなどの鉱物とチャート・砂岩他の堆積岩等であり，砂粒は摩滅して円礫化したものが大半である。在地産とみなすことができる。また，器体の接合状況は破断面が荒れており判然としない。

弥生時代前期の土器(第2図4～8)　5点が出土している。

4・5は壺の肩部の破片である。幅2mm前後の沈線を施している。いずれも器体内外

面をナデ調整する。胎土中には，径1～2mmの長石・石英・チャート，砂岩等の砂粒を均質に混入している。暗橙褐色を呈する。

6は壺の口縁部である。細片であるため口径法量は明確でないが，15～16cm前後と推定している。短い筒状の頸部からゆるやかに外反して立ち上がる口縁部を持つ。口唇部は丸くおさめている。頸部に一条以上の削り出し凸帯がある。この凸帯は，浅く削り出した後に沈線を付加して凸帯の存在を強調したもので，微弱なものである。口縁部外面はナデ，内面には横方向のヘラミガキが施されている。胎土精良。砂粒の状況は4・5と同じであるが，長石・石英の混入が目立つ。明橙色。

7は壺の肩部の破片である。扁球形の体部を有していたものと思われる。破片下端(肩部と胴部境界)に1条以上の削り出し突帯を巡らしている。この凸帯も6と同様の手法によるもので，凸帯上端を浅く削り出してから沈線を施している。器体外面にていねいなヘラミガキ，内面はナデののち粗いヘラミガキを施す。胎土は6とほぼ同じである。明橙色を呈する。

8は壺の底部である。底径は14cm前後である。胎土に径2mm前後の砂粒を多く含みやや粗い。器体は荒れているが破断面に接合痕が明瞭に残っており，成形手法のようすがうかがうえる。まず厚さ1cm前後の円板を作って基礎となし，円板上に粘土紐を積み上げる。その後，内底面の屈曲部に粘土紐を押し込んで補強するというものである。

次に，これらの帰属時期について考えてみたい。

兵庫県伊丹市口酒井遺跡の調査報告では，縄文時代晩期の深鉢について口縁部凸帯の位置による分類を行っている(注3)。この分類によると2はD形式に該当する。D形式は「口縁部に接して凸帯を貼付けるが，口縁端部内面と凸帯上面の強いヨコナデのため凸帯が下方に長く垂れ下がる」という特徴を持つものである(注4)。在地型胎土を有するDタイプの深鉢形土器は，口酒井遺跡のほか神戸市篠原A遺跡等でも確認されており，生駒西麓の胎土を有する「長原式」と共伴することが確かめられている(注5)。今回報告した馬場池東方遺跡の近接地では，亀岡市北金岐遺跡(注6)，同千代川遺跡(注7)に出土例があり，やはり「長原式」と伴出している。

以上のことから，当該資料は晩期末葉に位置づけることができよう。

1・3については類例を知らないが，口縁部凸帯の粗略化が著しく，2と同様の時期を考えておきたい。

6・7はいずれも削り出し凸帯を有しており，弥生時代前期中段階に位置づけられるものである。削り出し凸帯は遺存しているのが最上段のみであるので全体はわからないが，下端部に残る沈線のようすからみると凸帯は幅広でその上にヘラ描き直線文を巡らしてい

たようである。

4. おわりに

以上，馬場池東方遺跡から出土した資料について観察結果を中心に記してきた。その中で縄文晩期のものについては，晩期末葉の「長原式」に併行する在地型の土器と考え，弥生土器については前期中段階に位置づけられるものとした。

近年，大阪湾岸地域では，縄文時代晩期末葉の「長原式」併行期の土器群に弥生時代前期古～中段階の土器が共伴して出土する事例が増えつつあり，時代区分論と稲作導入期の土器様相についての活発な議論が行われている。(注8)

今回報告した資料はあまりにも断片的であり，共伴関係は不明であるが，ごく近接した地点で出土している点が注目される。

共伴関係の有無は別としても，これらの資料は山あいの丘陵上において検出されており，当地域での稲作導入期の集落実態の一端を示すものとして興味深いものがある。

（たしろ・ひろし＝当センター調査第2課調査第2係調査員）

注1　黒坪一樹「馬場池東方遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第36冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

注2　弥生時代前期の資料としては，綾部市味方遺跡・舘遺跡，福知山市武者ケ谷遺跡など，縄文晩期の資料としては夜久野荒掘遺跡など。

注3　南　博史編『口酒井遺跡―第11次発掘調査報告書―』　(財)古代學協會　1988

注4　1;　注3と同じ
2;　南　博史「大阪湾周辺地域における縄文晩期凸帯文土器の変遷」(『朱雀』第2集　京都文化博物館)　1989

注5　下條信行・定森秀夫・南　博史『神戸市灘区篠原A遺跡』　(財)古代學協會　1984

注6　『北金岐遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第5冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985

注7　『千代川遺跡第11次発掘調査概報』　亀岡市教育委員会　1987

注8　『縄文から弥生へ』　帝塚山考古学研究所　1984
田中和弘「河内平野中央部における農耕社会形成期の様相」(『山賀遺跡』　(財)大阪市文化財センター)　1985
注4-2と同じ

府下遺跡紹介

48. 小野毛人墓

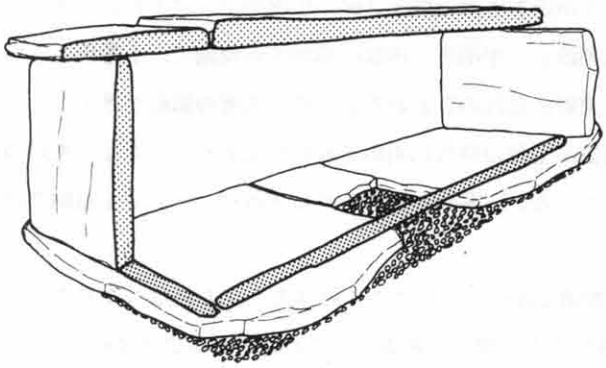
小野毛人墓は，京都市左京区上高野西明寺山にあって，丘陵の斜面に南向きに造られた墳墓である。この墓からは墓誌が出土しているので，小野毛人という被葬者名と墳墓の築造年代がわかった。このように被葬者や築造年次がわかるのは，例が少なく，古墳の年代観を考える上で数少ない貴重な資料となっている。この墳墓の所在する辺りは，現在は雑木林になっているが，大正３(1914)年に発掘調査と整備工事が行われ，墳墓の概要がほぼ明らかにされている。

この墳墓は，慶長18(1613)年11月24日に発見された後，元禄10(1697)年に埋め戻された。そのため，この墳墓の研究は主として掘り出された時点での記録や，伝聞に基づいて行われた。また，墓誌については，伊藤東涯や狩谷掖斎のように実見したものもおり，すでに近世から詳細な考証が行われており，かなり詳しく知られるようになった。しかし，墳墓については，ほとんど知られておらず，大正３年の調査までは一二を除いて，その概要を記したものはなかった。

梅原末治氏は，このときの調査について詳しい報告文を書いている。それによれば，墳墓の外形は，楕円形を呈しており，封土をもち，四周を石で積み上げたものであった。墓壙内には，小石室を築いている。底石は三枚の平石からなり，四壁には各一枚ずつの大きい平石を用いて石室を構築していた。墓誌は，石室の中央に花崗岩製の石の箱に納めて南北方向に置かれていたようである。この墳墓は，火葬墓ではなく，遺体を木棺に納めて，上部から土壙内へと安置され，その棺の上か横に墓誌を納めた箱を入れたと推定されている。

第１図　遺跡所在地(1/25,000)

墳墓の現状は，長さ約４m・幅約3.3m・高さ約1.2mで，南北に長軸をもつ楕円形を呈している。四周の積石は，1895年修理した際のもので，当初からこのような規模と形状であったかどうかは不明である。1613年当時には封土は風雨のために流されたらしく，ほ



第2図　小石室推定図(『飛鳥時代の古墳』より)

とんど見られずに，天井石がすぐに見えるような位置にまで削られてしまったようである。しかし，元来は，小封土が存在したようで，7世紀末から8世紀初頭頃の終末期古墳の築造方法を考える上で重要な基準資料となる。

また，墳墓の立地であるが，山間部の南斜面に位置し，やや奥まったところにあって，風水思想にかなったものといえよう。6世紀中葉以降，百済から五経博士・暦博士をはじめとする博士たちが交替で朝廷に来る制度が成立した。この制度によって，百済経由で風水思想が流入したと思われ，7世紀後半の終末期の古墳では，この風水思想に基づいて墳墓地の選定が行われていたと推定される。

次に，墳墓の造営時期であるが，墓誌銘に「造営歳次丁丑年十二月上旬即葬,」とあって，丁丑年＝677年に行われたことがわかる。ところが，この墓誌については，墳墓の造営時ではなく，持統朝以後になって追納されたとみるのが有力になってきている。それは，墓誌銘の記述と，『日本書紀』に見える表記の年代があわないことに起因している。墓誌銘の全文は，

(表)　飛鳥浄御原宮治天下天皇　御朝任太政官兼刑部大卿位大錦上

(裏)　小野毛人朝臣之墓　営造歳次丁丑年十二月上旬即葬

とあり，「小野毛人朝臣」となっている点が問題である。小野氏は，元来，小野臣という臣姓氏族であり，いわゆる大夫層に属する大化以前からの名族である。小野氏が朝臣を称するようになるのは，『日本書紀』天武13(684)年11月戊申朔条に，大三輪君以下の「凡五十二氏，賜姓曰朝臣,」とあるように，684年以後のことである。したがって，この墓誌が677年の段階で作成されるはずはなく，どうしても墳墓の造営時期よりも後になって墓誌が作成されたと考えざるをえない。確かに，冠位や氏姓の問題は，墓誌などの表記を考える上で重要な手がかりであり，最もその作成時の情勢を反映しやすいものであるため，基本的にこの立場は正しいと考えられる。

それでは，いつ頃までに追納されたのであろうか。従来の研究では，毛人の子供の毛野の時であると言われている。『続日本紀』和銅7(714)年4月辛未条には，「中納言従三位

兼中務卿勲三等小野朝臣毛野薨，小治田朝大徳冠妹子之孫，小錦中毛人之子也」とあり，毛野の時代は，毛野自身が「参議朝政」・中納言と国政に参加する時期で，小野氏としては最も勢力のあった時代である。東野治之氏の言われるように，先考の顕彰だけでなく，墓域の明示・占有を目的として墓誌が毛野の時代に追納されたのであろう。ただ，毛野の時代というだけではばくぜんとしているが，墓誌を手がかりにすれば，もう少し追納の時期がしぼれそうである。

浅田芳郎氏は，和銅2(709)年埋納を提唱しているが，私はもう少し異なった見方をしている。墓誌には「飛鳥浄御原宮治天下天皇」とあるが，この宮号が成立するのは，『日本書紀』朱鳥元(686)年7月戊午条に，「改元朱鳥元年，朱鳥，此云阿詞美苔利，仍名宮曰飛鳥浄御原宮」とあるので，686年7月20日のことである。また，「～宮治天下天皇」の表記は，7世紀の金石文に一般的に見える表記であるが，大宝元(701)年に施行された大宝律令以後は，基本的には「治天下」を用いずに「御宇」や「馭宇」を用いることになる。これは，大宝令の公式令・詔書条の規定に基づく表記法であるが，現存する金石文も基本的には公式令に基づいて記述されたようで，8世紀以降の金石文には「治天下」と記されたものは粟原寺鑪盤銘等の若干の例外を除いてはない。

以上の点からすれば，「飛鳥浄御原宮治天下天皇」の表記から見る限り，686～701年の間に作成されて追納されたと考えることが可能になる。しかも，小野朝臣毛野は，文武4(700)年から大宝2(702)までは「筑紫大弐」として九州の大宰府にいたらしいので，追納時期は700年以前と考えることもできよう。また，天皇号の成立を689年施行の飛鳥浄御原令によるとすれば，さらに年代をしぼりこむこともできるが，天皇号の成立時期については議論が分かれるので，ここではそのことには触れず，墓誌の追納時期を一応，686年から700年までの間に求めたい。

このように，埋納の終わった墳墓に対して墓誌を追納するといったことが行われたことは確実である。終末期古墳研究を進める上で，墳墓と墓誌の存在が確認できる数少ないものの一つである。

（土橋　誠）

〈参考文献〉

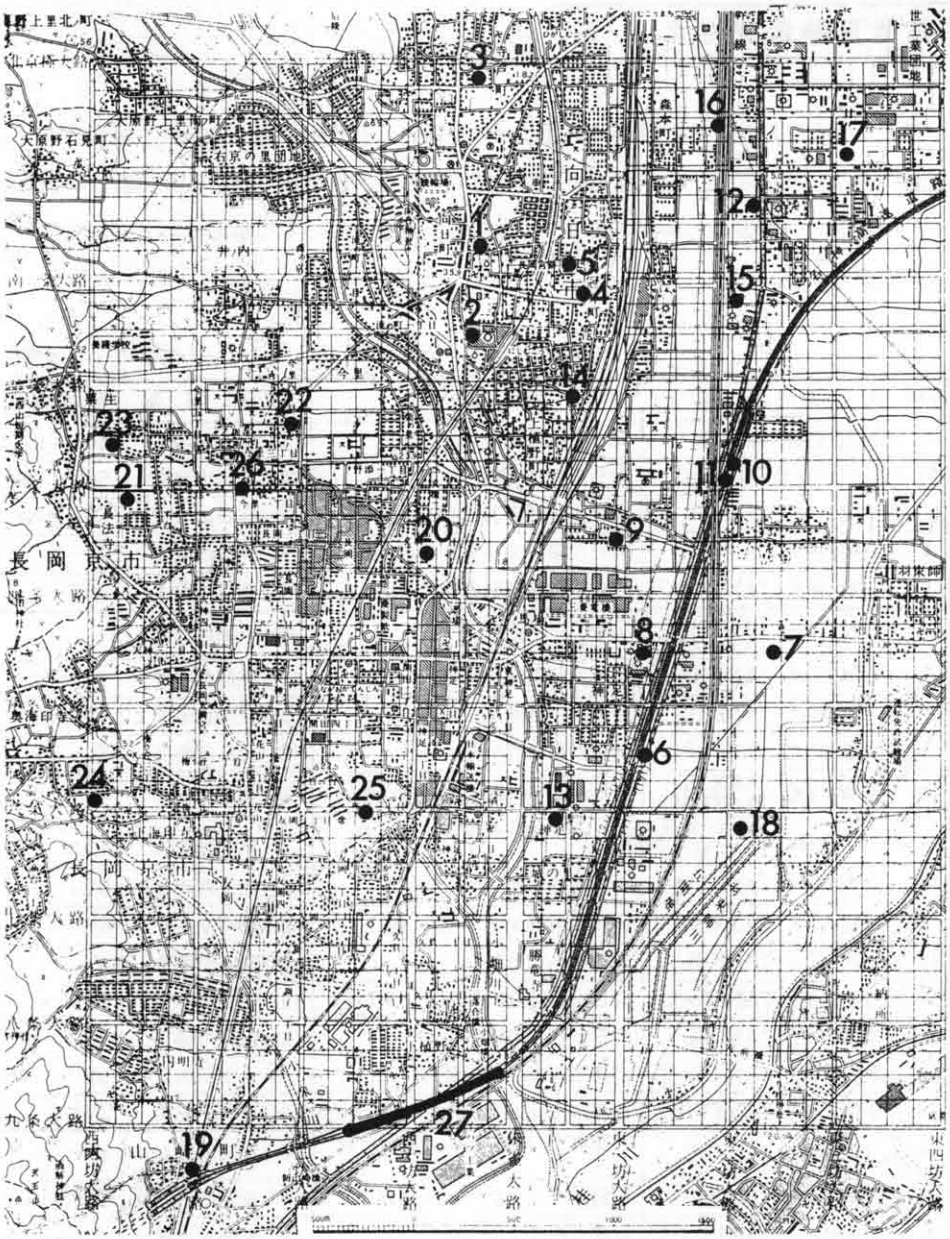
梅原末治「小野毛人の墳墓と其の墓誌」『考古学雑誌』第7巻第8号
浅田芳郎「小野毛人墓誌に見える紀年銘に就いて―「和銅二年追納」憶測論―」『郷土文化』13
『日本古代の墓誌』　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
『飛鳥時代の古墳』　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
『京都市の文化財―京都市指定・登録文化財第二集―』　京都市文化観光局

長岡京跡調査だより・33

平成2年5月23日・6月27日・7月25日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は，宮域5件，左京域13件，右京域9件の計27件であった。これら27件の調査地は，位置図・一覧表のとおりである。このうち，主なものいくつかについて，調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表　(1990年7月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第242次	7AN13L	向日市鶏冠井町東ノ段25-1	(財)向日市埋文	4/16～5/7
2	宮内第243次	7AN15S	向日市上植野町馬立2，2-3	(財)向日市埋文	5/14～5/26
3	宮内第244次	7AN11P	向日市寺戸町初田6-2	(財)向日市埋文	5/14～5/26
4	宮内第245次	7AN4G	向日市鶏冠井町東井戸47，49-1	(財)向日市埋文	7/2～
5	宮内第246次	7AN9W	向日市鶏冠井町御屋敷27-1	(財)向日市埋文	7/17～
6	左京第216次	7ANMTB-2，7ANMXY他	京都市伏見区羽束師～長岡京市勝竜寺	(財)京都府埋文	
7	左京第233次	7ANXOK-3	京都市伏見区羽束師古川町	(財)京都市埋文	10/2～6/5
8	左京第235次	7ANLRB-2	長岡京市馬場六ノ坪1-4	(財)長岡京市埋文	1/8～5/2
9	左京第240次	7ANFOR	向日市上植野町落堀16-1	(財)向日市埋文	4/2～5/14
10	左京第241次	7ANXYT・7ANXKM	京都市伏見区羽束師菱川山畷	(財)京都府埋文	4/9～
11	左京第242次	7ANFSK-3，7ANFMI-5	向日市上植野町尻引，南淀井，脇田	(財)京都府埋文	4/9～
12	左京第244次	7ANDTK-3	向日市森本町高田17	(財)向日市埋文	6/20
13	左京第245次	7ANMKC-3	長岡京市神足木寺町2-1他	(財)長岡京市埋文	6/8～
14	左京第247次	7ANFJK-4	向日市上植野町浄徳16-1	(財)向日市埋文	6/4～
15	左京第248次	7ANEIS-3	向日市鶏冠井町石橋12-3・13他	(財)向日市埋文	6/11～
16	左京第249次	7ANDSD	向日市森本町下町田26	(財)向日市埋文	6/25～
17	左京第250次	7ANVRZ-2	京都市南区久世大藪町	(財)京都市埋文	6/25～
18	左京第251次	7ANYTH-2	京都市伏見区淀水垂町	(財)京都市埋文	7/9～
19	右京第349次	7ANSDE	乙訓郡大山崎町円明寺御所ノ内他	(財)京都府埋文	4/9～
20	右京第350次	7ANIMI-3	長岡京市一文橋一丁目13-4	(財)長岡京市埋文	4/25～5/2
21	右京第351次	7ANJNM-3	長岡京市長法寺中島7-1	(財)長岡京市埋文	4/26～6/7
22	右京第352次	7ANITT-13	長岡京市今里四丁目5	(財)長岡京市埋文	5/15～7/18
23	右京第353次	7ANJKK-4	長岡京市長法寺中畠21	(財)長岡京市埋文	6/1～6/30
24	右京第354次	7ANOHR-6	長岡京市下海印寺方丸	(財)長岡京市埋文	6/25～
25	右京第355次	7ANMSI-9	長岡京市神足三丁目438-5・9	(財)長岡京市埋文	6/27～7/18
26	右京第356次	7ANISY	長岡京市今里二丁目112	(財)長岡京市埋文	7/6～
27	右京第357次	7ANSID-1，7ANFMI-5，7ANFDW	乙訓郡大山崎町円明寺壱町田，下植野，飯田，北枚方	(財)京都府埋文	7/2



▽番号は一覧表・本文(　)内と対応

調査地位置図

左京第233次(7)　(財)京都市埋蔵文化財研究所

前年度から調査を継続していて，主として，奈良時代と平安時代の水田面が検出された。特に，奈良時代の条里制に基づいた水田遺構は，発掘調査で確かめられた数少ない例となっている。また，平安時代の水田面は，2面あり，長期にわたって，水田が営まれたことを示している。

左京第241次(10)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

この調査では，中世の南北溝や東西溝が検出されているが，長岡京期の東二坊大路の東側溝が検出できた点が大きな成果といえる。中世の溝群については，数条の溝がまとまっている点が特徴的であり，通常の乙訓地域の例とは若干異なることが指摘されている。

左京第242次(11)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京期の遺構として三条条間小路の南北両側溝を検出している。溝の心々間距離が約24.8mもあり，大路幅をしていたことが確認された。

左京第244次(12)　(財)向日市埋蔵文化財センター

長岡京期の遺構として東三坊第一小路の東側溝が見つかっている。また，その東側で，掘立柱建物跡が1棟検出されており，左京南一条三坊七町の当時のようすが比較的よくわかる資料が得られた。

左京第245次(13)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

六条大路北側溝が確認され，そこから，土師器・須恵器をはじめ，墨書土器・瓦・斎串・人形・木簡などが出土した。中でも，この木簡には，「謹告知往還上中下尊等御中迷□少子事　右件少子以今月十日自勢多□□×／錦織□麻呂／年十一／字名者錦本云音也　皇后宮舎人字名村太之家□□×」と表面に記されており，迷子になった子供を探すために立てた告知札であったことがわかった。ただ，告知札とすると，あまりにも小さくて薄い点が問題ではあるが，内容的には完全に告知札である。また，この木簡には戸籍に記載された名称と，通称名とも呼ぶべき名称が「字名」としてあがっている。このことは，8世紀段階で戸籍名以外に通

称名が存在し，そちらの方が一般的には用いられていた可能性がある。

右京第352次(22)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査は，長岡京の調査というよりは，今里車塚古墳の調査であり，後円部と周溝を検出している。後円部の裾のところには葺石があり，周溝の形態が南西部のところがやや方形にまがる点が報告されている。この古墳の形態が円墳であることを考えるとおもしろい結果が得られたといえる。

右京第353次(23)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査も，長法寺七ツ塚古墳群第4次調査というべきもので，長法寺七ツ塚5号墳の墳丘調査がその中心である。調査の結果，5号墳は方墳で，墳丘の中央から盛土し，三工程に分けて構築されたことがわかった。埋葬施設としては，墳頂部に木棺直葬の内部主体が1基見つかっている。

中海道遺跡　(財)向日市埋蔵文化財センター

第19次・第20次と調査され，縄文時代から中・近世にいたる遺物が出土している。中でも，弥生時代の遺構として土坑を検出しており，なかから大量の土器群と鉄斧が出土するなど，弥生時代の乙訓地域を解明する資料が得られた。

なお，左京第245次調査で出土した木簡の釈文については，(財)長岡京市埋蔵文化財センターより提供を受けた。また，読みについては，(財)長岡京市埋蔵文化財センター山本輝雄氏・中島皆夫氏，(財)向日市埋蔵文化財センター山中　章氏・清水みき氏をはじめ，多くの方がたにお世話になった。記して謝意を表する。

（土橋　　誠）

センターの動向（2．5～7）

1．できごと

5．1　新規採用職員辞令交付（別掲）

7～9　新規採用職員研修

8　足利健亮・都出比呂志理事，遠所遺跡（弥栄町）等視察

11　全国不動産文化財データベース検討委員会（奈良国立文化財研究所）出席（土橋調査員）

藤井　学理事，遠所遺跡等視察

16　川上　貢理事，遠所遺跡等視察

17～18　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（茨城県水戸市）出席（荒木事務局長・中谷次長・木村主事）

19　第56回研修会（別掲）

古代学研究会例会（大阪市）発表（細川調査員）

23　塚本古墳（八木町）発掘調査開始

長岡京連絡協議会開催

24　佐原　眞理事，発掘調査指導

杉末遺跡（宮津市）発掘調査開始

26　樋口隆康・上田正昭理事，遠所遺跡等視察

28　佐原　眞理事，遠所遺跡等視察

6．2　遠所遺跡発掘調査現地説明会実施

7　佐原　眞理事，発掘調査指導

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（向日市）出席（荒木事務局長・杉原課長）

8　監事監査

6.10　奥丹後地方史研究大会（峰山町）講演（増田主任調査員）

6.11　瓦谷古墳（木津町）発掘調査開始

京都大学北部構内遺跡（京都市）発掘調査終了（4.23～）

山形古墓群（久美浜町）関係者説明会実施

12　都出比呂志理事，長岡京跡視察

13　杉末遺跡発掘調査終了（5.24～）

14～15　全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（大阪市）出席（杉原課長，水谷係長，上田主事）

15　都出比呂志理事，発掘調査指導

人事異動（別掲）

15～26　奈良国立文化財研究所研修「中・近世陶器調査課程」参加（森島調査員）

18～22　新規採用職員研修

19　里遺跡（綾部市）発掘調査関係者説明会実施

長岡京跡左京第216次（長岡京市）発掘調査関係者説明会実施

27　第28回役員会・理事会開催―於・平安会館―福山敏男，樋口隆康副理事長，中沢圭二，川上　貢，上田正昭，藤井　学，足利健亮，佐原　眞，都出比呂志，藤田价浩，木村英男，堤圭三郎の各理事，岸　義次監事出席

長岡京連絡協議会開催

2　佐原　眞理事，発掘調査指導

4　下後太田古墳群（弥栄町）発掘調査開

始

6～7　埋蔵文化財写真技術研究会(奈良国立文化財研究所)参加(田中調査員)

7.17　内和田古墳群(加悦町)発掘調査開始

こくばら野遺跡(久美浜町)発掘調査開始

18　佐原　眞理事，発掘調査指導

7.20　常務理事・事務局長辞令交付(別掲)

横浦経塚(久美浜町)発掘調査関係者説明会実施

24　乙訓管内府公所新・転任職員研修，当センター見学

25　長岡京連絡協議会開催

26　興戸遺跡発掘調査関係者説明会実施

2.　普及啓発事業

5.19　第56回研修会開催―於・京都社会福祉会館：古代の瓦生産―石井清司「木津町上人ケ平遺跡の調査について」，上原真人「奈良時代の官営造瓦工房」

3.　人事異動

5.1　柴　暁彦調査員採用

6.14　太田至郎理事・堂端明雄監事・奥村幸一監事・荒木昭太郎常務理事兼事務局長総務課長事務取扱退任

杉原和雄調査第2課長退職(文化財保護課記念物係長)

細川康晴調査員退職(丹後郷土資料館技師)

15　竹中康雄理事・岸　義次監事・前川靖典監事新任

堤圭三郎事務局長委嘱(文化財保護課長兼務)

小林将夫次長兼総務課長，安藤信策調査第2課長採用

野島　永調査員採用

7.19　堤圭三郎事務局長解職

20　松阪寛支常務理事・事務局長就任

受贈図書一覧(2.4.17～2.7.31)

苫小牧市埋蔵文化財センター	とまこまい埋文だより
青森県埋蔵文化財調査センター	埋文あおもり 第9号
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	紀要X 平成元年度，考古遺物資料集 第10集，岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第136～147集
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.48
秋田県埋蔵文化財センター	研究紀要 第5号，年報8 平成元年度，秋田県文化財調査報告書 第188～201集
(財)勝田市文化振興公社	ぶんかざいほごねんぽう 1989，(財)勝田市文化振興公社調査報告 第1・3集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	研究紀要 7，(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第89・99・102～107集
(財)香取郡市文化財センター	(財)香取郡市文化財センター調査報告書 第1～3集
(財)君津郡市文化財センター	研究紀要 Ⅲ，(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第44・47・50～52集
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第31号
(社)石川県埋蔵文化財保存協会	社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報 1
山梨県埋蔵文化財センター	研究紀要 5～6，山梨県埋蔵文化財調査センター調査報告 第51～52集
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4
(財)磐田市埋蔵文化財センター	安久路2・3号墳発掘調査の写真集，大久保・高山古墳群発掘調査報告書，昭和63年度 遠江国分寺跡周辺国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書，昭和63年度 坂上遺跡・藤上原3遺跡発掘調査報告書，昭和63年度 匂坂上4遺跡発掘調査報告 Ⅱ
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No.21，愛知県埋蔵文化財情報 5，年報 平成元年度，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10～17集
(財)滋賀県文化財保護協会	文化財教室シリーズ 112～115，滋賀文化財だより 114～147，紀要 第3号，(財)滋賀県文化財保護協会設立20周年展 レトロレトロの展覧会，滋賀県の諸職―滋賀県諸職関係民俗文化財調査報告書―，近江の遺物―国・県指定の史跡，考古資料―，近江の文化財教室 2，文化財調査出土遺物仮収納保管業務 平成元年度発掘調査概報，県道佐野長浜線道路改良工事に伴う国友遺跡発掘調査報告書，長命寺川(蛇砂川)中小河川改良工事関連埋蔵文化財調査報告 Ⅰ，県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書 Ⅵ-2，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVII-4，XVII-7～12
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第121～123号
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第22回)資料

(財)大阪市文化財協会	葦火 25～26号
(財)東大阪市文化財協会	吉田遺跡第1次発掘調査報告，鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告
(財)枚方市文化財研究調査会	ひらかた文化財だより 第3～4号
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究報告 22～25
(財)元興寺文化財研究所	出土鉄製遺物の実態調査 九州，中国，四国地方，同 近畿，中部地方，同 関東，東北，北海道地方，出土青銅製遺物の実態調査報告書 近畿，中国，四国，九州地方，同 北海道，東北，関東，中部地方
奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1989，奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度，平城京東市跡推定地の調査Ⅷ—第10次発掘調査概報—
(財)広島県埋蔵文化財センター	ひろしまの遺跡 第40～41号
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No.202～203
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋文えひめ 第11～12号，甦る埋蔵文化財 第3集，埋蔵文化財発掘調査報告書 第34～37集
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅴ～Ⅵ
小郡市埋蔵文化財調査センター	小郡市文化財調査報告書 第50・59～61・64～68集
札幌市教育委員会	札幌市文化財調査報告書 XXXIX～XL
三石町教育委員会	ショップ遺跡
胆沢町教育委員会	埋蔵文化財調査報告書 第20集
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書 第133～134集
山形県教育委員会	山形県埋蔵文化財調査報告書 第148集
米沢市教育委員会	米沢市文化財年報 No.3，米沢市埋蔵文化財報告書 第27集
吉井町教育委員会	吉井町文化財調査報告書 第21～22集
坂戸市教育委員会	坂戸市史 近代史料編，坂戸市遺跡群発掘調査報告書 第Ⅱ集
志木市教育委員会	志木市の文化財 第14集
市原市教育委員会	平成元年度 市原市内遺跡群発掘調査報告
小見川町教育委員会	小見川町内遺跡群発掘調査報告書 1989年度
袖ケ浦町教育委員会	千葉県袖ケ浦町内遺跡群発掘調査報告書
板橋区教育委員会	文化財シリーズ 第64～65集
北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告書 第6集
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告 32
海老名市教育委員会	相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書 Ⅰ
小田原市教育委員会	小田原城とその城下
鎌倉市教育委員会	今小路西遺跡

金井町教育委員会	万福寺跡の考察，金井町の石仏，金井町文化財調査報告書 第V集，金井町文化財調査報告 第7集
富山市教育委員会	平成元年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要，富山市任海砂田遺跡発掘調査概要
加賀市教育委員会	加賀市埋蔵文化財報告書 第20集
小松市教育委員会	二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡
高松町教育委員会	高松町若緑ヤキノ窯跡発掘調査報告，高松町大海西山遺跡発掘調査概要報告書，八野古窯跡群―農業構造改善事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書
鯖江市教育委員会	国指定史跡 王山古墳群保存整備事業概要
八代町教育委員会	八代町埋蔵文化財調査報告書 第7集
岡谷市教育委員会	榎垣外・梨久保遺跡発掘調査報告書(概報)，ふるさとウォッチングおかや歴史の道文化財めぐり(ガイド編)，同（資料編）
松本市教育委員会	松本市文化財調査報告 No.74・80・83～87，木村遺跡―古瓦を出土する平安時代集落址の発掘調査概報―
各務原市教育委員会	各務原市文化財調査報告書 第6～7集，前渡猿尾堤調査報告書
菊川町教育委員会	菊川町埋蔵文化財報告書 第15～21集
稲沢市教育委員会	土田関連遺跡発掘調査報告書，高町畑遺跡発掘調査報告書，稲沢市文化財調査報告 XXXV
瀬戸市教育委員会	尾呂―愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ埋設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―
豊橋市教育委員会	豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第11集
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告 17
八日市市教育委員会	雪野山古墳―第1次発掘調査概報―
今津町教育委員会	今津町文化財調査報告書 第8集，今津町内遺跡分布調査報告書，今津町内遺跡発掘調査概要報告書(北仰西海道遺跡他)
五個荘町教育委員会	五個荘町文化財調査報告書 16
貝塚市教育委員会	貝塚市埋蔵文化財調査報告 第17・19集
柏原市教育委員会	柏原市文化財概報 1989-Ⅰ～Ⅶ
泉南市教育委員会	泉南市文化財調査報告書 第10・21集
吹田市教育委員会	吹田市文化財ニュース No.11，文化財紀要 2，平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
大東市教育委員会	大東市埋蔵文化財調査報告書 第5～6集
東大阪市教育委員会	山賀遺跡発掘調査概要
松原市教育委員会	松原市遺跡発掘調査概要 昭和63年度
八尾市教育委員会	八尾市文化財調査報告 20～21
阪南町教育委員会	阪南町埋蔵文化財報告 X
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第19集

明石市教育委員会	赤根川・金ケ崎窯—昭和63年度発掘調査概報—
尼崎市教育委員会	尼崎市文化財調査報告 第21集
加古川市教育委員会	文化財ニュース No.31～33
加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財報告 3～4，奈良大学考古学研究室調査報告書 第13集
三木市教育委員会	久留美毛谷—古窯跡群等の発掘調査報告書—
加東郡教育委員会	埋蔵文化財調査年報 1987年度
朝来町教育委員会	朝来町文化財調査報告書 第2集
篠山町教育委員会	篠山町文化財資料 第8～9集
八鹿町教育委員会	兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ 第3・9集
橿原市教育委員会	橿原市埋蔵文化財調査概報 6～7，史跡新沢千塚古墳群保存整備報告
御所市教育委員会	御所市文化財調査報告書 第7～9集
天理市教育委員会	天理市埋蔵文化財調査報告 第4集，天理市埋蔵文化財調査概報(1990)，赤土山古墳第2次範囲確認調査概報
香芝町教育委員会	鶴峯荘第2地点遺跡発掘調査概報
榛原町教育委員会	高塚遺跡第2次発掘調査概要報告書，榛原町文化財調査概要 3 発掘された宇蛇の古代文化
鳥取市教育委員会	鳥取市文化財報告書 26～27
岡山県教育委員会	岡山県埋蔵文化財報告 20
玉野市教育委員会	玉野市埋蔵文化財発掘調査報告書 4
東広島市教育委員会	東広島市教育委員会文化財調査報告 第15～18集，浄福寺遺跡群発掘調査報告書
下関市教育委員会	綾羅木川下流域の地域開発史
豊北町教育委員会	夕陽ケ丘古墳
福岡県教育委員会	福岡県文化財調査報告書 第90～92集，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 16～19，推定金光寺跡環境整備事業報告書，福岡東バイパス関係埋蔵文化財調査報告，椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 2，岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集
太宰府市教育委員会	太宰府市の文化財 第15集
田川市教育委員会	田川市文化財調査報告書 第6集
直方市教育委員会	直方市文化財調査報告書 第11集
宗像市教育委員会	宗像市文化財調査報告書 第25集
志摩町教育委員会	志摩町文化財調査報告書 第10集
志免町教育委員会	志免町文化財調査報告書 第3集
庄内町教育委員会	庄内町文化財調査報告書 第1集
須恵町教育委員会	須恵町文化財調査報告書 第3～4集

前原町教育委員会	前原町文化財調査報告書 第27～34集
若宮町教育委員会	若宮町文化財調査報告書 第8集
新吉富村教育委員会	新吉富村文化財調査報告書 第5集
大平村教育委員会	大平村文化財調査報告書 第5集
佐賀県教育委員会	環濠集落　吉野ヶ里遺跡概報
杵築市教育委員会	杵築市埋蔵文化財調査報告書 第2集
宮崎県教育委員会	宮崎県埋蔵文化財調査報告書 第33集，九州自動車道(人吉～えびの間)建設工事に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書，林遺跡，平成元年度 農業基盤整備事業に伴う発掘調査報告書，国衙・郡衙古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書 Ⅱ
宮崎市教育委員会	宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書 Ⅱ，蓮ヶ池横穴群保存整備事業概報 Ⅳ，金剛寺原第1遺跡・金剛寺第2遺跡，柿木原地下式横穴墓56—1号・江田原第1遺跡
清武町教育委員会	清武町埋蔵文化財調査報告書 第4集
東郷町教育委員会	東郷町文化財調査報告書 第2集
釧路市立博物館	釧路市立博物館収蔵資料目録 X，釧路市立博物館紀要 第15輯
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第7号
埼玉県立さきたま資料館	調査研究報告 第3号
国立歴史民俗博物館	歴博 第40～41号，国立歴史民俗博物館研究報告 第25～28集
千葉県立房総風土記の丘資料館	千葉県立房総風土記の丘だより 第19号
千葉市立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第17号
君津市立久留里城址資料館	君津市立久留里城址資料館年報 昭和63年度，開館10周年記念誌
船橋市郷土資料館	資料館だより 第48～50号
調布市郷土博物館	調布市郷土博物館だより No.34，調布の動物ばなし，調布の年中行事
板橋区立郷土資料館	常設展示図録，板橋区立郷土資料館紀要 第8号—1989年度版—高島秋帆と澤太郎左衛門—板橋の工業事始—
大田区立郷土博物館	大田区地図集成(第22回特別展「絵画・地図でみる大田区」図録)，大田区立郷土博物館だより 第22号
世田谷区立郷土資料館	資料館だより No.12，世田谷区史料叢書 第5巻，大場美佐の日記 2
出光美術館	出光美術館館報 第69～70号
富山市考古資料館	富山市考古資料館報 第20号
石川県立歴史博物館	石川れきはく 第14～15号
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第45～46号
茅野市尖石考古館	狐塚遺跡，御小屋之久保遺跡
平出遺跡考古博物館	古屋敷遺跡，竜神平遺跡

浜松市博物館伊場遺跡資料館	妙法塚古墳，西脇遺跡，宮竹野際遺跡，根本山古墳群 Ⅱ
浜松市博物館	浜松市博物館だより No. 30
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 91～92，沼津市歴史民俗資料館資料集 8，沼津市博物館紀要 14，古墳で探る地域の歴史
常滑市民俗資料館	常滑市民俗資料館紀要 Ⅳ
斎宮歴史博物館	河南省文物展
大津市歴史博物館	博物館だより 第2号
高島町歴史民俗資料館	高島の民俗 第70号
水口町立歴史民俗資料館	水口町文化財調査報告書 第7集
彦根城博物館	彦根城博物館調査報告 Ⅱ，彦根城博物館だより 9
大阪市立博物館	研究紀要 第22冊，大阪市立博物館報 No. 29
柏原市歴史資料館	柏原市歴史資料館館報 1
兵庫県立歴史博物館	わたりやぐら 第15号
神戸市立博物館	博物館だより No. 32
洲本市立淡路文化史料館	珉平焼 補遺
春日町歴史民俗資料館	野々間遺跡
播磨町郷土資料館	播磨大中遺跡の研究
鳥取県立博物館	鳥取県立博物館研究報告 第27号，郷土と博物館 70号
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No. 100～101，研究紀要 Ⅱ
出雲玉作資料館	玉作資料館ニュース 第14号
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース 第3号
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの史
九州歴史資料館	大宰府史跡 平成元年度発掘調査概報
北九州市立考古博物館	紫川―弥生・古墳時代の風景―
佐賀県立博物館	佐賀県立博物館・美術館報 No. 87～88
佐賀県立九州陶磁文化館	セラミック九州 No. 21，肥前地区古窯跡調査報告書 第7集，九州陶磁文化館年報 昭和63年度―No. 8―
長崎県立美術博物館	長崎県立美術博物館だより No. 107
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No. 20～23，宇佐歴史民俗資料館年報 平成元年度
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学論集―歴史学・地理学―第22号
筑波大学歴史・人類学系	歴史人類 18号
早稲田大学所沢校地埋蔵文化財調査室	お伊勢山遺跡の調査 第4部
東京大学総合研究資料館	東京大学総合研究資料館ニュース 19号
東京大学文学部考古学研究室	東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第8号
國學院大學文学部考古学研究室	國學院大學文学部考古学実習報告 第19集

國學院大學考古学資料館	國學院大學考古学資料館要覧 1989，國學院大學考古学資料館紀要 第6輯
駒沢学園校地内遺跡調査会	東京都稲城市 駒沢学園校地内遺跡発掘調査報告書
日本大学史学会	史叢 第44号
立教大学博物館学研究室	MOUSEION 35
早稲田大学考古学会	古代 第89号
金沢大学資料館	金沢大学資料館だより 第1号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊
広島大学文学部考古学研究室	広島県史跡六の原製鉄場跡—調査と整備の記録—，朝日ゴルフクラブ朝日コース建設予定地内遺跡発掘調査概報
愛媛大学埋蔵文化財調査室	愛媛大学埋蔵文化財調査報告 Ⅱ
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 V
北網圏北見文化センター	川東13遺跡，北網圏北見文化センター研究報告(考古学関係論文集 I)
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第12～14冊
群馬県企業局	三原田遺跡 第2巻
大宮市遺跡調査会	大宮市文化財調査報告 第27～30集
文化庁	全国遺跡地図 奈良県
日本考古学協会	日本考古学年報 41
小笠原諸島他遺跡分布調査会	小笠原諸島他遺跡分布調査会 平成元年度調査概報(1)
鶴川第二地区遺跡調査会	真光寺・広袴遺跡群 Ⅳ
日本製鋼所遺跡調査会	武蔵国府関連遺跡調査概報—日鋼地区第1次調査—
武蔵国分寺関連遺跡調査会	武蔵国分寺関連遺跡の調査 I
鎌倉考古学研究所	小町1丁目120番地-1地点遺跡，佐助ヶ谷遺跡，浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡，長谷1丁目290-1地点遺跡，如意庵—円覚寺境内如意庵遺跡発掘調査報告—，十二所稲荷小路遺跡内やぐら発掘調査報告書，名越・山王堂跡発掘調査報告書，由比ヶ浜3丁目194番25外遺跡調査報告，史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書 Ⅲ，昭和63年度 鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書
玉川文化財研究所	香林寺北遺跡発掘調査報告書，植之台遺跡発掘調査報告書，高倉遺跡発掘調査報告書，高燥遺跡第2次発掘調査報告書
国立国会図書館	日本全国書誌 No.1749・1751・1759
中央公論社	図説日本の古代 第5巻
(株)名著出版	歴史手帖 第199～202号
ニュー・サイエンス社	考古学ジャーナル No.322
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所報 第9号，シンポジウム「考古学と

	中世史研究―中世考古学及び隣接諸学から―」資料集
(財)古代學協會	古代文化 第376～379号，古代学研究所研究報告 第1輯
(財)冷泉時雨亭文庫	志くれてい 第32～33号
(株)同朋舎	古人骨は語る―骨考古学ことはじめ―
(財)関西文化学術研究都市推進機構	けいはんな風土記
和泉丘陵内遺跡調査会	和泉丘陵内遺跡発掘調査概要 Ⅸ，府中遺跡群発掘調査概要 X
有限会社　関西プロセス	埋文写真研究 Vol.1
朝鮮学会	朝鮮学報 第135輯
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第32号
國立中央博物館	國立中央博物館古蹟調査報告 第21輯
(財)京都市埋蔵文化財研究所	京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第8冊
京都市埋蔵文化財調査センター	京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度，平安京跡発掘調査概報 平成元年度，鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成元年度，植物園北遺跡発掘調査概報 平成元年度，中久世遺跡発掘調査概報 平成元年度
(財)向日市埋蔵文化財センター	向日市埋蔵文化財調査報告書 第28集
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和63年度，長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第5集
京都府教育委員会	京都の文化財 第8集
丹後町教育委員会	京都府丹後町文化財調査報告 第5集
久美浜町教育委員会	京都府久美浜町文化財調査報告 第11集
網野町教育委員会	京都府網野町文化財調査報告 第6集
弥栄町教育委員会	弥栄町の文化財
宮津市教育委員会	宮津市文化財調査報告 第8～9集
綾部市教育委員会	綾部市文化財調査報告 第17集
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第24～25冊
大山崎町教育委員会	大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第7集
宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概要 第15集
八幡市教育委員会	ヒル塚古墳発掘調査概報，八幡市遺跡地図
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第20集，城陽の文化財案内―遺跡遺物を中心に―
山城町教育委員会	京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第7～8集
加茂町	加茂町史編さんだより紫陽花 第9号
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館友の会ニュース No.34，仏画に美を求めて―石川晴彦没後十年―(特別陳列図録 26)，海・ふね・人(特別陳列図録 27)

京都府立総合資料館	総合資料館だより No. 84，京都府資料目録追録 No. 6，資料館紀要 第18号
(財)京都府文化財保護基金	文化財報 No. 69
京都市文化観光局文化財保護課	京都市文化財だより 第13号
京都国立博物館	昭和63年度 京都国立博物館年報
亀岡市文化資料館	第9回企画展図録 武者行列—甲冑の世界—
京都市歴史資料館	企画展図録 京都市の文化財新指定の美術工芸品
向日市文化資料館	研究紀要 第4号，向日市文化資料館報 第5号
宇治市歴史資料館	昭和63年度 宇治市歴史資料館年報，宇治の文化財—市指定を中心に—
(財)泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第六巻
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度
同志社大学校地学術調査委員会	同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 22
花園大学考古学研究室	花園大学考古学研究室だより 17
口丹波史談会	丹波史談 131号
精華町文化財愛護会	精華町文化財愛護会だより 第7号
精華町の自然と歴史を学ぶ会	波布理曽能 第7号
京都考古刊行会	京都考古 第56号
穴沢咏光	会津田村山古墳，日本刀の起源展—直刀から彎刀へ—
岩崎誠	大原野
岡本正太郎	古代文化を考える 第21号
土橋誠	飯岡車塚古墳発掘調査報告，温井13号墳発掘調査概報，京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第8集，京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 II
水野正好	奈良大学考古学研究室調査報告書 第13集
村田晃一	宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984～1988

—編集後記—

残暑の厳しい日々が続きますが，情報37号が完成しましたのでお届けします。

本号では，職員の投稿がありましたので，掲載させていただきました。また，韓国の李榮勲氏(韓國國立慶州博物館)の御好意により，31号に引き続き，義昌・茶戸里遺跡の略報を掲載することができました。記して感謝の意を表します。

また，本号では資料紹介として二本の原稿を掲載いたしました。よろしく御味読ください。

なお，当調査研究センター創立10周年記念特別展は，9月2日をもって盛況のうちに終了することができました。詳細は次号に掲載させていただくこととして，紙面をもって御礼申し上げます。

(編集後記＝土橋　　誠)

京都府埋蔵文化財情報 第37号

平成2年9月29日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）